①【調査した遺跡】

平成 13 年度～平成 15 年度の 3 ヵ年にかけて実施した愛島東部地区の調査では、泉遺跡・前野田東遺跡・北台遺跡の 3 つの遺跡の調査を実施しました。これらの遺跡は、それぞれ縄文時代から平安時代の遺跡として遺跡台帳に登録されています。JR 名取駅から南西側へ約 2.6～2.7 km、JR 館腰駅から北西側へ同じく約 2.6～2.7 km 付近に位置しており、現在は、愛の杜・愛島郷 地区の住宅地や、宮城県警察学校やホームセンターなどがあります。

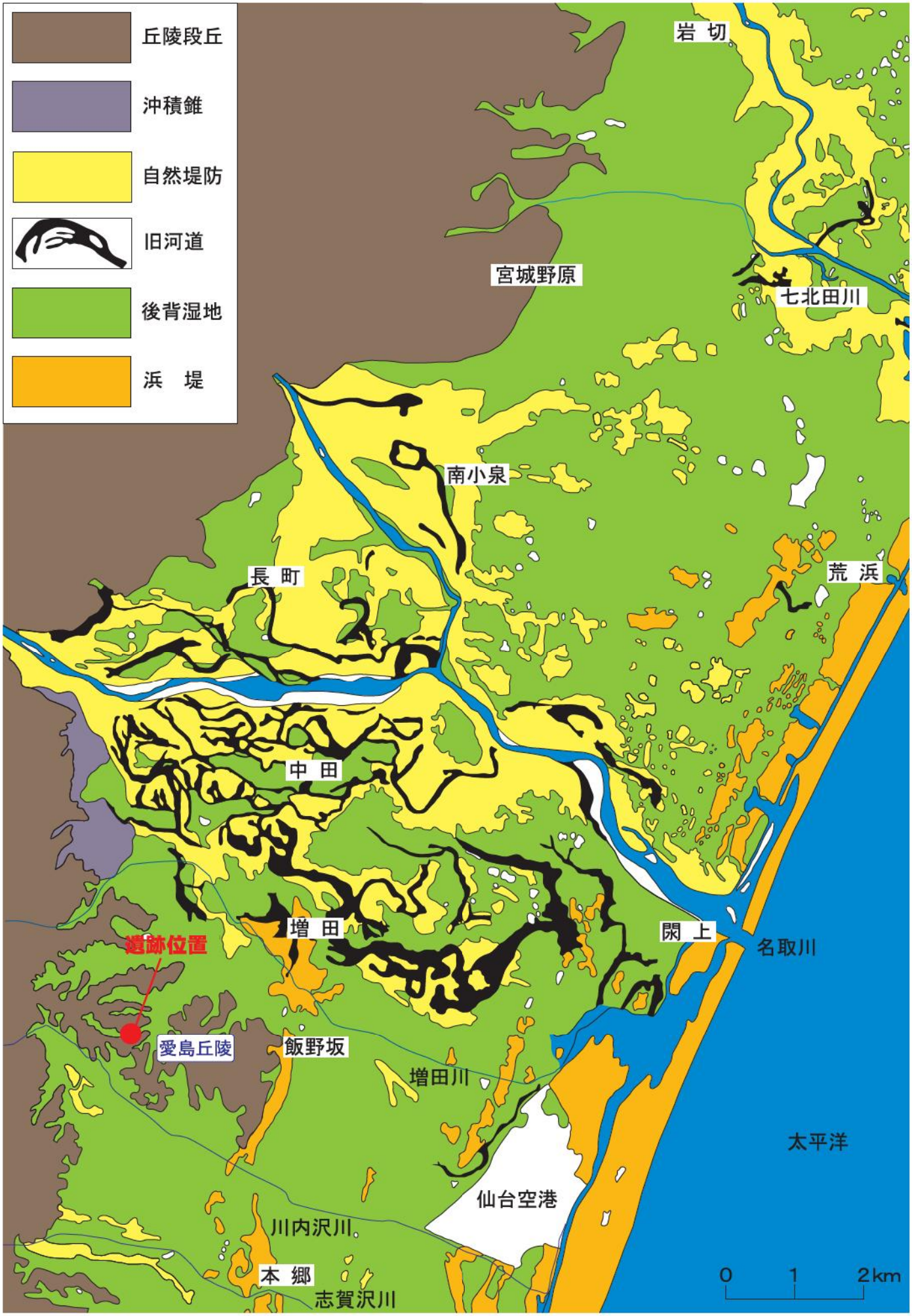
愛島東部第二地区の位置

0 500m
S=1:10,000

②【遺跡の立地】

今回調査を行なった遺跡は、市内西部に連(つら)なる標高 200m 前後の高舘(たかだて)丘陵(きゅうりょう)から東側へ大きく張り出す愛島丘陵(めでしまきゅうりょう)（標高 35m 前後）と呼ばれる丘陵上にある遺跡です。愛島丘陵は市内でも数多くの遺跡が見つかっている場所で、平野部を見下ろすことが出来る東端部には、全長 168m で東北地方最大規模の雷神山古墳(らいじんやまこふん)や、前方後方墳(ぜんぽうこうほうふん)や方墳(ほうふん)がまとまって所在する飯野坂古墳群(いいのざかこふんぐん)といった国の指定を受けている遺跡もあります。

このパネルは、仙台平野の微細(びさい)な地形を表した微地形図(びちけいず)です。図を見ると遺跡が所在する愛島丘陵の北側と南側とでは、地形の状況が大きく異なっていることが分かります。これは平野部が出来上がる過程(かてい)が北側



遺跡周辺の微地形分類図

③【縄文時代早期から前期頃の名取】

旧石器時代には、温暖（おんだん）な気候と寒冷（かんれい）な気候が交互にやってくる気候であったと考えられており、寒冷な時期には南極・北極などの氷河（ひょうが）が発達して海水面の高さが低くなり、日本列島は大陸と陸続きになっていたと考えられています。最後の寒冷な時期が終わる今から約15,000年前頃を境に地球全体の気候が暖かくなったため、南極・北極などの氷河が溶（と）けて、海の水量が増えて海水面の高さが高くなり、海岸線は現在よりもずっと内陸側まで入り込んでいました。海岸線が最も内陸側へと入り込んでいたと考えられている今から約7,900～7,500年前頃には、愛島丘陵の南側から岩沼市松ヶ丘・土ヶ崎にかけて張り出す丘陵との間は、海水が入り込み内湾状（ないわんじょう）になっていたと考えられています。

また、宇賀崎貝塚（うかざきかいづか）をはじめとする周辺の貝塚の分布や、松崎・宇賀崎・周防崎（しゅうぼうざき）などの地名の分布なども、丘陵南部がかつて海であったことを物語るものです。

一方、愛島丘陵の北側一帯は、南側ほど海水が山側へ入り込んでおらず、湿地（しっち）・沼沢地（しょうたくち）などの地形が広がっていたと考えられています。これは、山から運んでくる土砂の量が多いという名取川の特徴により、海水が山側へ入り込んでくるスピードよりも、土砂が山から運ばれて来て平野が拡（ひろ）がるスピードの方が速かったためだと考えられています。愛島丘陵の北側に旧河道（微地形図の黒色部分）や、その周囲に形成される自然堤防（しぜんていぼう）（黄色部分）と呼ばれる微高地（びこうち）が発達していることは、比較的早い段階で平野が形成されていた様子を物語っています。

(1) 今から6～8,000年前ごろ

④【調査した場所とこれまでの調査】

今回調査した全体の面積は約 63,000 ㎡と広範囲におよぶものとなりました。 実際の調査にあたっては、泉遺跡をⅠ区～Ⅴ区に、前野田東遺跡をⅠ区～Ⅵ区に区切って調査を行ないました。

●平成１３年度：泉遺跡のⅠ区～Ⅳ区

●平成１４年度：泉遺跡のⅤ区

前野田東遺跡のⅠ区西半分とⅡ区～Ⅳ区

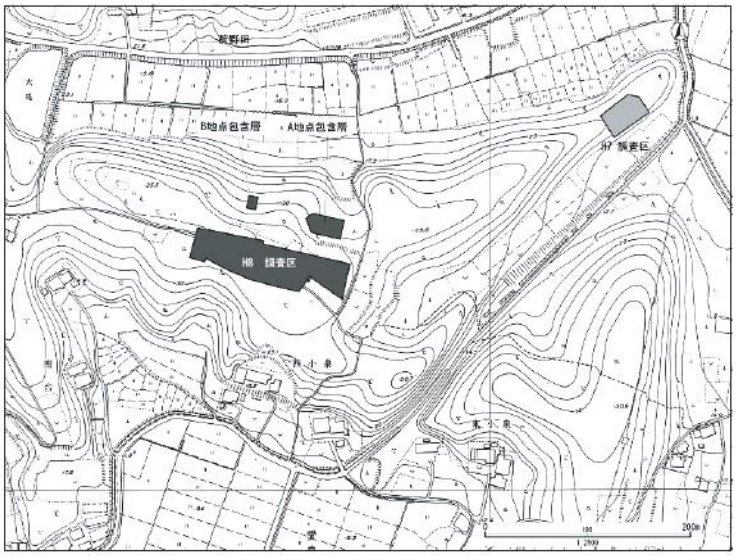
北台遺跡

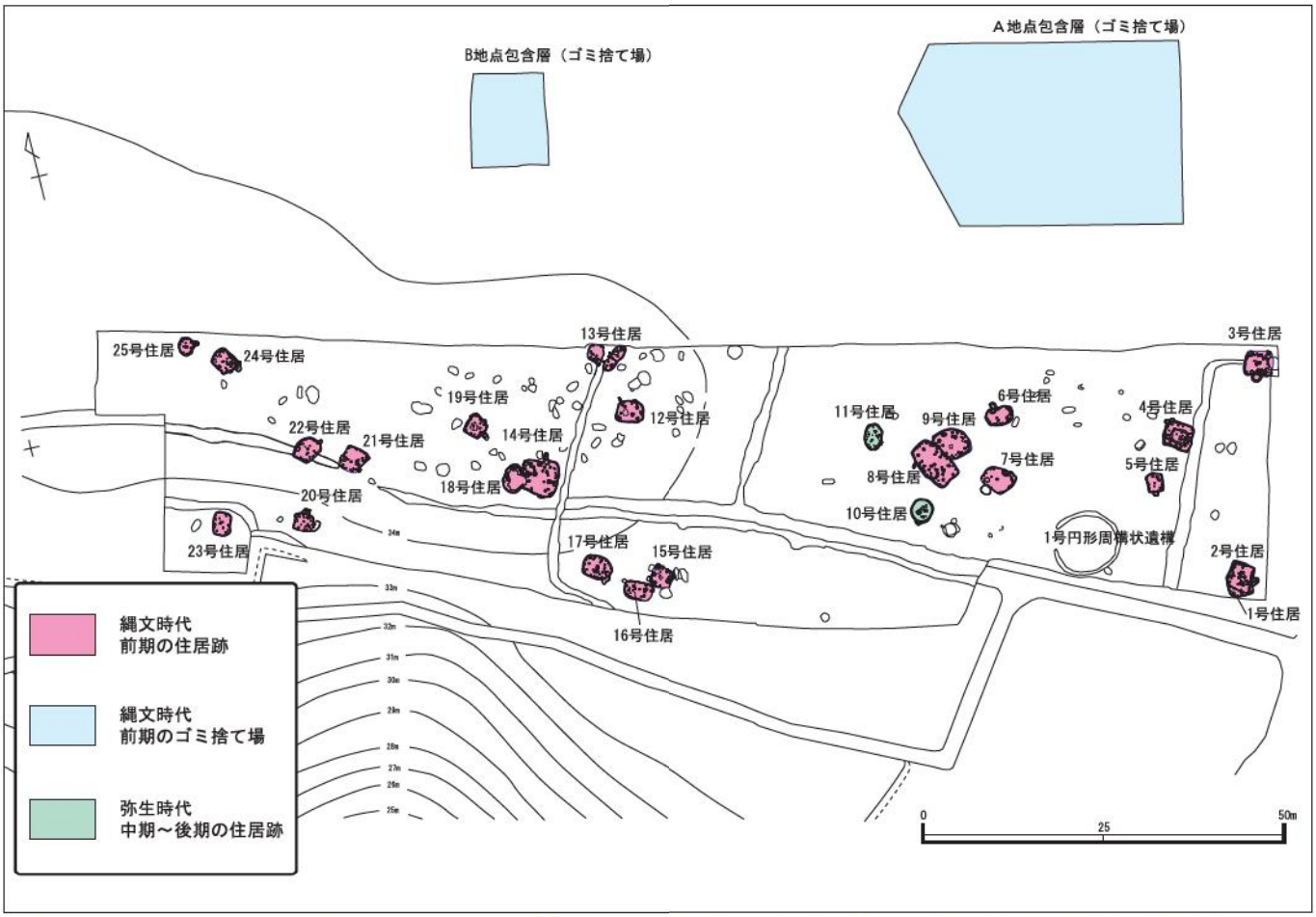
●平成１５年度：前野田東遺跡のⅠ区東半分とⅤ区～Ⅵ区

北台遺跡
前野田館跡
前野田東遺跡
Ⅵ区
Ⅲ区
Ⅳ区
Ⅴ区
Ⅱ区
Ⅰ区
宮城県警察学校
Ⅴ区
Ⅳ区
Ⅲ区
Ⅱ区
Ⅰ区
泉　遺　跡
1:3000
0
100
200
300m
遺跡範囲

遺跡と調査区の区分

泉遺跡では、平成 7～8 年度に宮城県警察学校建設に先立って発掘調査が行なわれています。その時には、縄文時代前期頃の竪穴住居跡 23 軒や、火を焚(た)いた跡、ゴミ捨て場などが見つかっており、多くの縄文土器や石器などが出土しています。また、この他にも、弥生時代半ばから終わり頃の竪穴住居跡 2 軒や、古墳の一部の可能性もある遺構なども見つかっています。調査前は、写真のように山林が広がる丘陵でした。

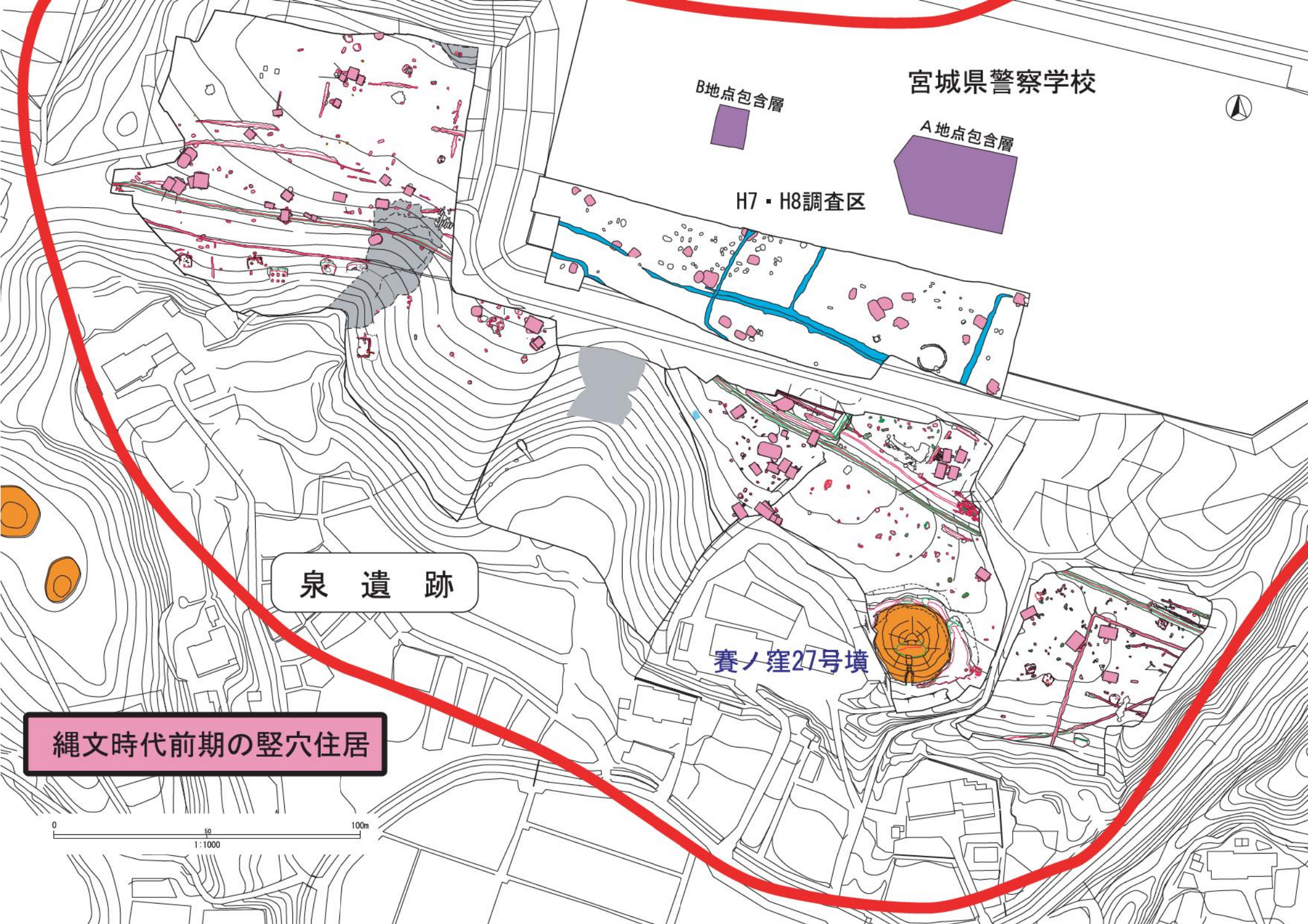




平成７・８年度に実施した泉遺跡の調査（現在の宮城県警察学校の場所）

⑤【縄文前期の大集落　泉遺跡】

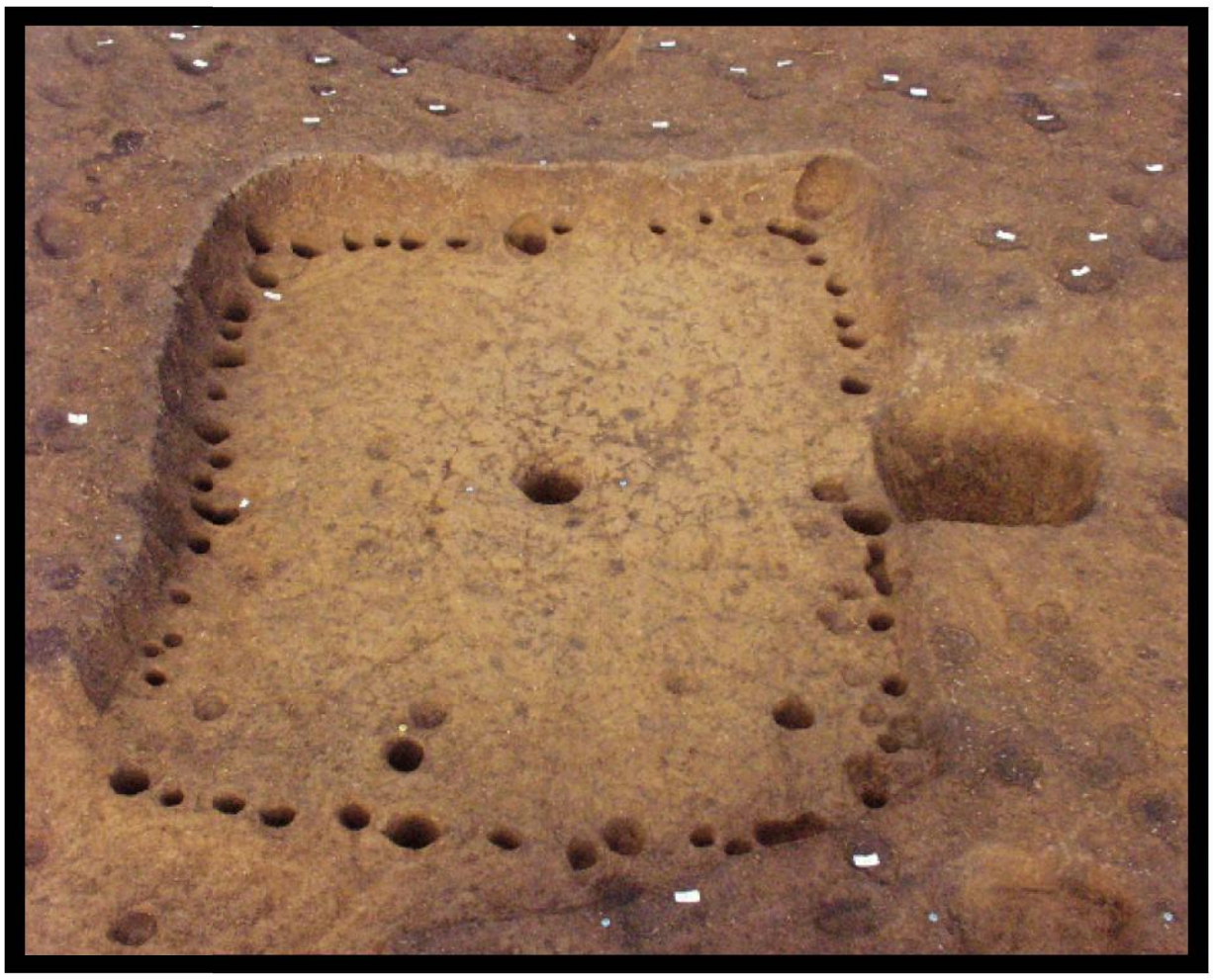
今回の泉遺跡の調査では、縄文時代の前期頃の竪穴式住居跡が 53 軒見つかりました。平成 7・8 年度に見つかっている 23 軒と合わせると、全部で 76 軒もの竪穴式住居が泉遺跡で見つかったことになり、かなり規模の大きな村があったことが分かりました。


宮城県警察学校
B地点包含層
A地点包含層
H7・H8調査区
泉　遺　跡
賽ノ窪27号墳
縄文時代前期の竪穴住居
0
50
100m
1:1000

竪穴式住居は、床などにしたい範囲の地面を掘り込み、底の部分を平らにして周囲などに骨組みとなる柱をすえて、そこにカヤなどで屋根をふいて生活する家です。泉遺跡で見つかった縄文時代前期（今から約6,000年前頃）の竪穴式住居跡は、一辺の長さが3m～6m前後の正方形・長方形・楕円形のものがほとんどです。

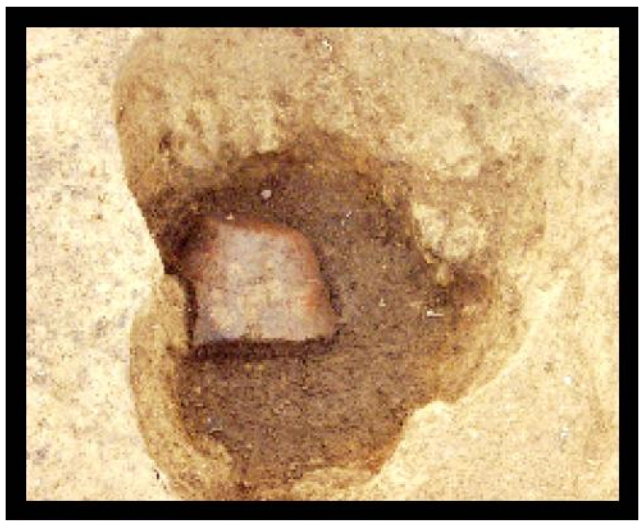
見つかった家の床を見てみると、写真のように床の真中付近に１本～２本の太い柱を建てた跡と、壁際（かべぎわ）に細めの柱を隙間（すきま）があまり開かないように据（す）えた跡が見つかりました。ここから壁の周りに据えた細めの柱を、屋根を支えるため真中付近に建てた太めの柱の上方で束（たば）ねて家の骨組みとするような、簡単なつくりの家であったのかもしれません。

また、外側の壁の中央付近に1m前後の大きさの穴が付いている家が多く見つかっています。この穴は「はりだし部」と呼ばれるもので、家の出入り口ではないかと考えている人もいますが、詳しいことはよく分かっていません。

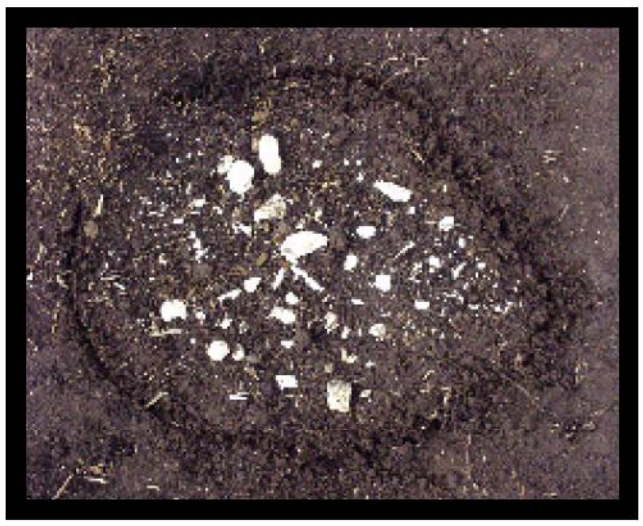


床の中央に建てられた柱跡の写真です。新旧２個の柱穴が重なって見つかったので、一度、建てかえられていることが分かります。右下の深い穴が新しい柱の穴で、奥は旧(ふる)い段階の柱穴に埋まっていた土を半分だけ掘って土のたまり方を見た様子です。新しい柱を建てる時に旧い柱穴に据えていた柱を抜き取り、穴をふさぐため上の方を埋めてから、となりに新しい柱を据えるための穴を掘っています。

見つかった住居の多くは、家の中で火を焚(た)いた跡が見られませんでしたが、住居の周囲では火を焚(た)いた跡が見つかっています。火を焚(た)いた所の地面は、土が焼けて赤くなっています。

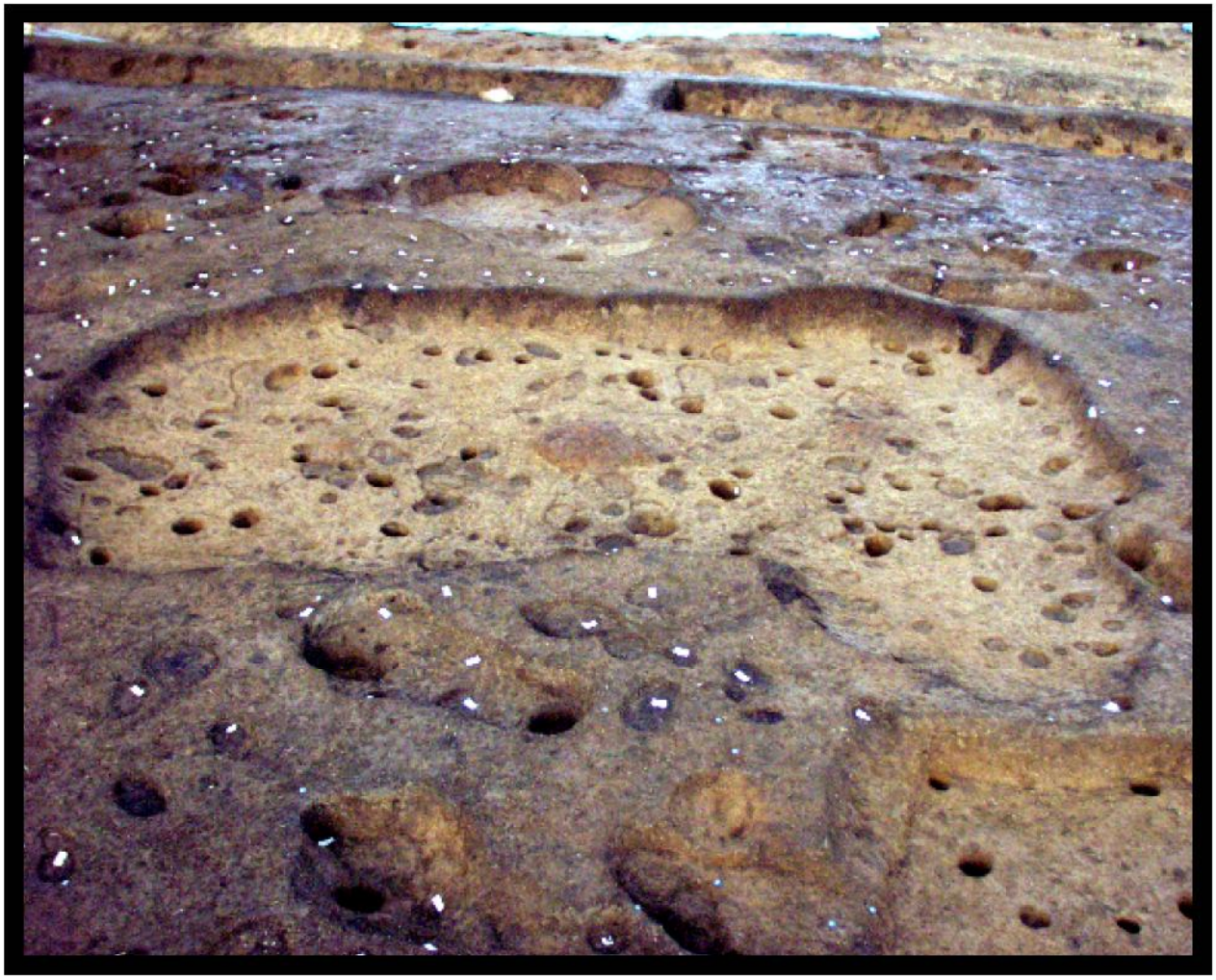


家の真ん中の太い柱穴の中から縄文土器が出土した様子です。 家が壊れてしまい引越しする時に、柱を抜き取った柱穴の中に使えなくなってしまった土器を捨てていったのかもしれません。



壊れて住めなくなった家の跡地など、地面が大きく窪(くぼ)んでいる場所は、その周りで生活する人達が、ゴミ捨て場所に利用したりすることがあります。写真は、周辺から採集(さいしゅう)して食料としていたヤマトシジミ・ハマグリなどの貝殻(かいがら)が出土した様子です。

住居跡の中には、一辺の長さが 8m を超える大きなものもわずかに見つかっています。家の中からは、大きな屋根をささえる太めの柱穴が多く見つかったり、炉の跡が真中付近に複数見つかったりするなど、その他の住居跡とは家のつくりも異なっている点があり、特別な住居跡であったのかもしれません。



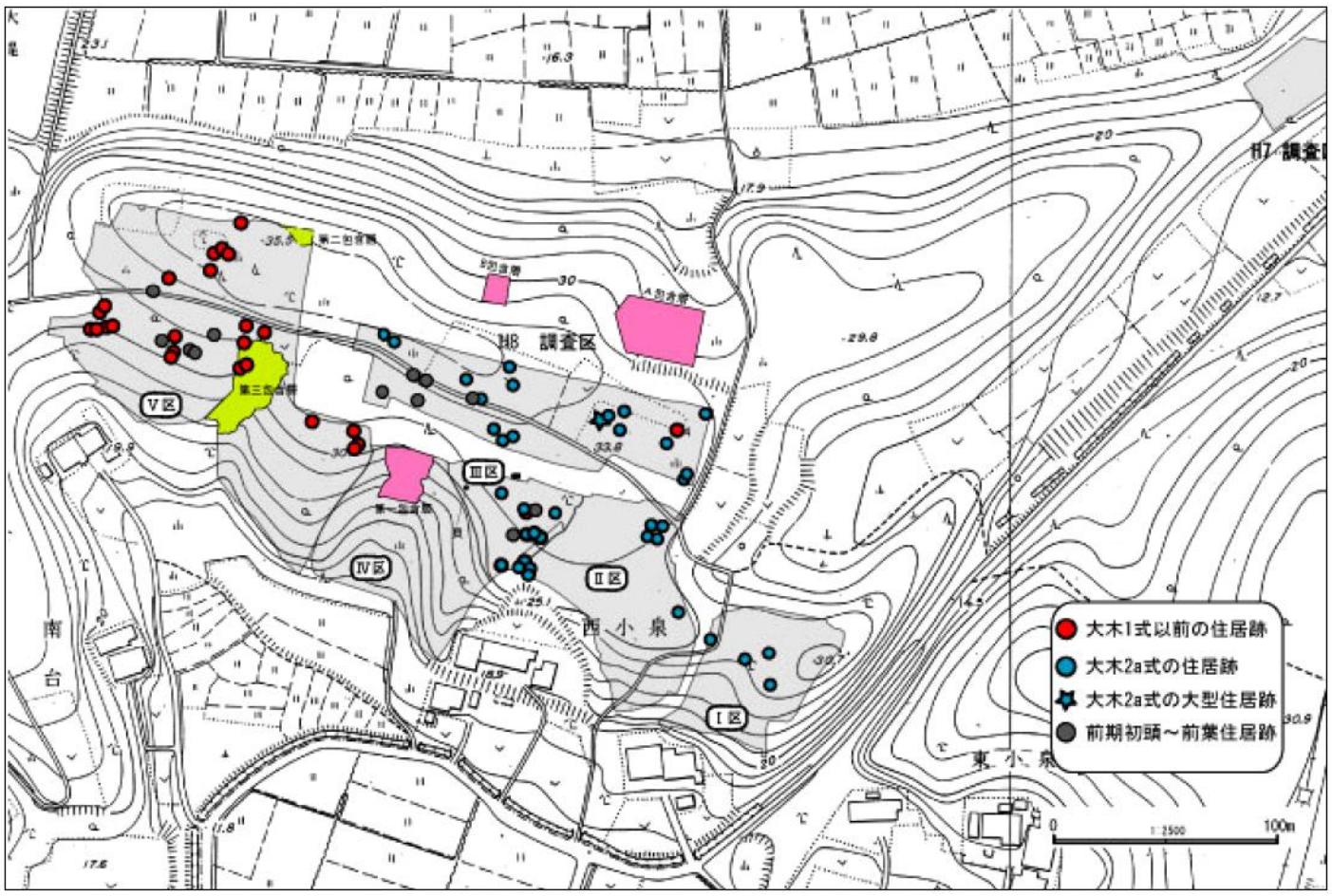
縄文時代前期の大型住居跡

⑥【村のうつり変わり】

縄文時代の住居跡は、出土した土器を詳しく観察したところ、大木１式土器と呼ばれる土器が出土した住居跡と、大木2a式土器と呼ばれる土器が出土した住居跡の、大きく２つのグループに分けることが出来ました。主に東北地方の南部では、このような土器が出土する遺構は、縄文時代前期頃（今から約 6,000 年前頃）のものと考えられています。

図は、警察学校が出来る前の地形図に、H7・8 年度の調査と今回の調査で見つかった住居跡の位置を、出土した土器の種類毎に色分けして示したものです。大木 1 式土器が出土した住居跡が赤丸で、それより新しい時期のものと考えられている大木 2a 式土器が出土した住居跡が青丸です。全体的に見ると、西側は赤丸の住居が、東側は青丸の住居が大半を占めており、赤丸の住居の時代から青丸の住居の時代にかけて生活場所が丘陵の西側から東側へと移っていることが分かりました。

また、赤丸住居の近くのゴミ捨て場（図の緑色部分）では大木１式の土器が、青丸住居の近くのゴミ捨て場（図のピンク色部分）では大木 2a 式土器がそれぞれ多く見つかることからも、生活場所の中心が東側へと移動したことが伺われます。



⑦【村のようす】

村の中には、竪穴住居がある居住スペース以外にも、空き地や、お墓をつくる場所、ゴミ捨て場所などのように、生活する場所がある程度決められていた可能性もあります。このうち泉遺跡ではゴミ捨て場となっていたと思われる場所がいくつか見つかっており、丘陵の沢地状に窪んだ斜面などがゴミ捨て場として選ばれていたようです。こうした場所では、多くの土器や石器のかけらなどが出土しています。

貝塚のようす

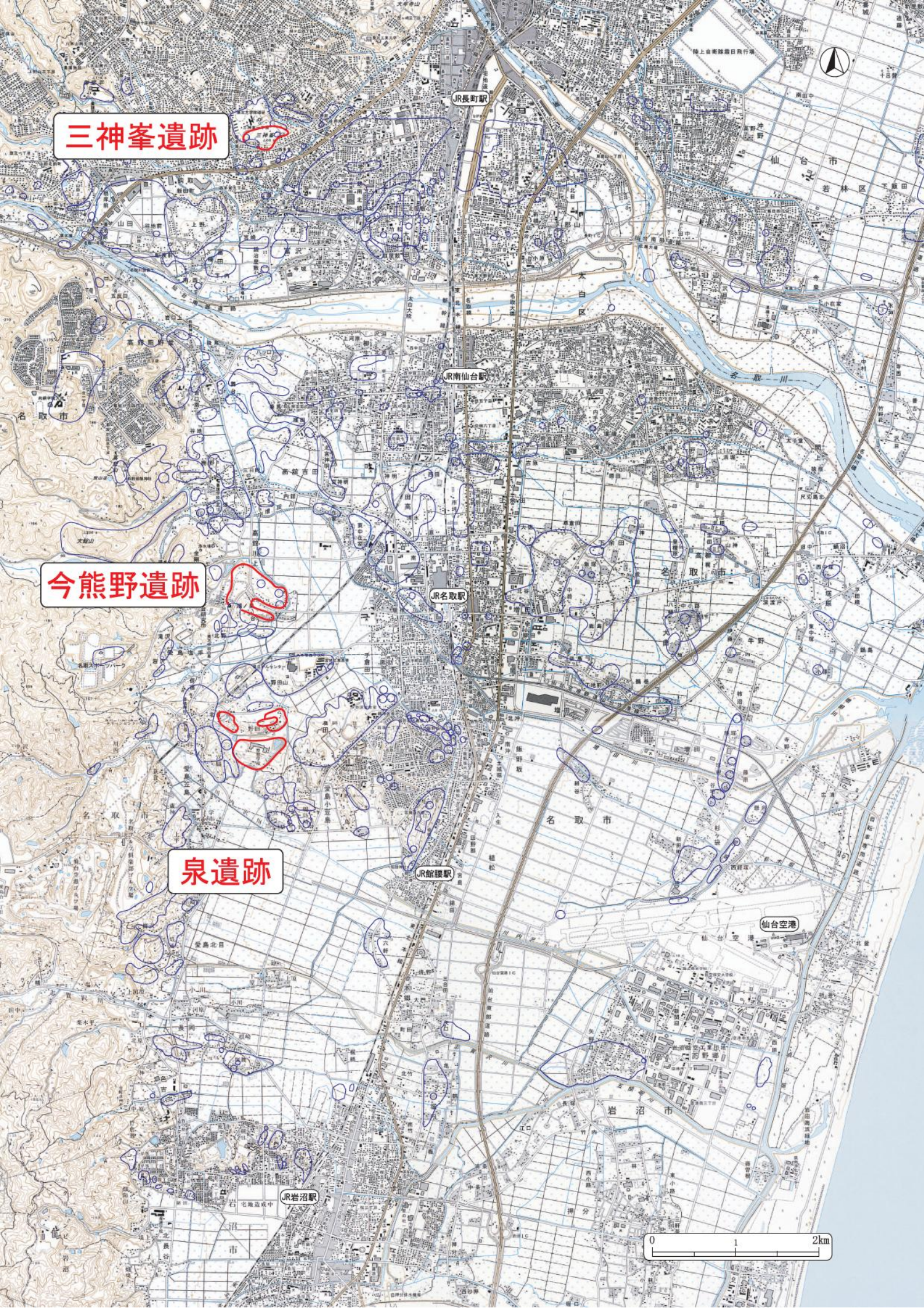
貝塚の断面

また、規模は小さいものですが、食料として食べた貝の殻などを捨てた場所である貝塚も見つかっています。捨てられていた貝には、ヤマトシジミやハマグリ、カキなどの貝が含まれていました。

この他には、動物などの獲物（えもの）をつかまえるための落とし穴もいくつか見つかっています。穴の底の部分には、落ちてきた獲物に刺さるように、先端をとがらせた杭（くい）などを打ち込んでいたと思われる小さな穴が見つかっています。

⑧【今熊野遺跡と泉遺跡】

泉遺跡の北側約 1.8 kmの箕輪(みのわ)丘陵の上には、同じ頃の大規模な村と考えられている今熊野遺跡(いまくまのいせき)があります。今熊野遺跡では昭和 46・47 年に発掘調査が行なわれ、泉遺跡と時代・形態などが類似(るいじ)した多数の竪穴住居跡やゴミ捨て場などが見つかっており、調査当時には日本最大級の縄文時代の村が見つかったとして注目されました。また、泉遺跡から北側約 7 km地点にある仙台市三神峯(みかみね)遺跡でも小規模な村の跡が見つかっており、泉遺跡の周辺は、縄文時代のはじめ頃に、人々が生活しやすい環境が広がっていたものと思われます。


三神峯遺跡
今熊野遺跡
泉遺跡
JR長町駅
JR南仙台駅
JR名取駅
JR館腰駅
JR岩沼駅
仙台空港
名取市
仙台市
岩沼市
0
1
2km

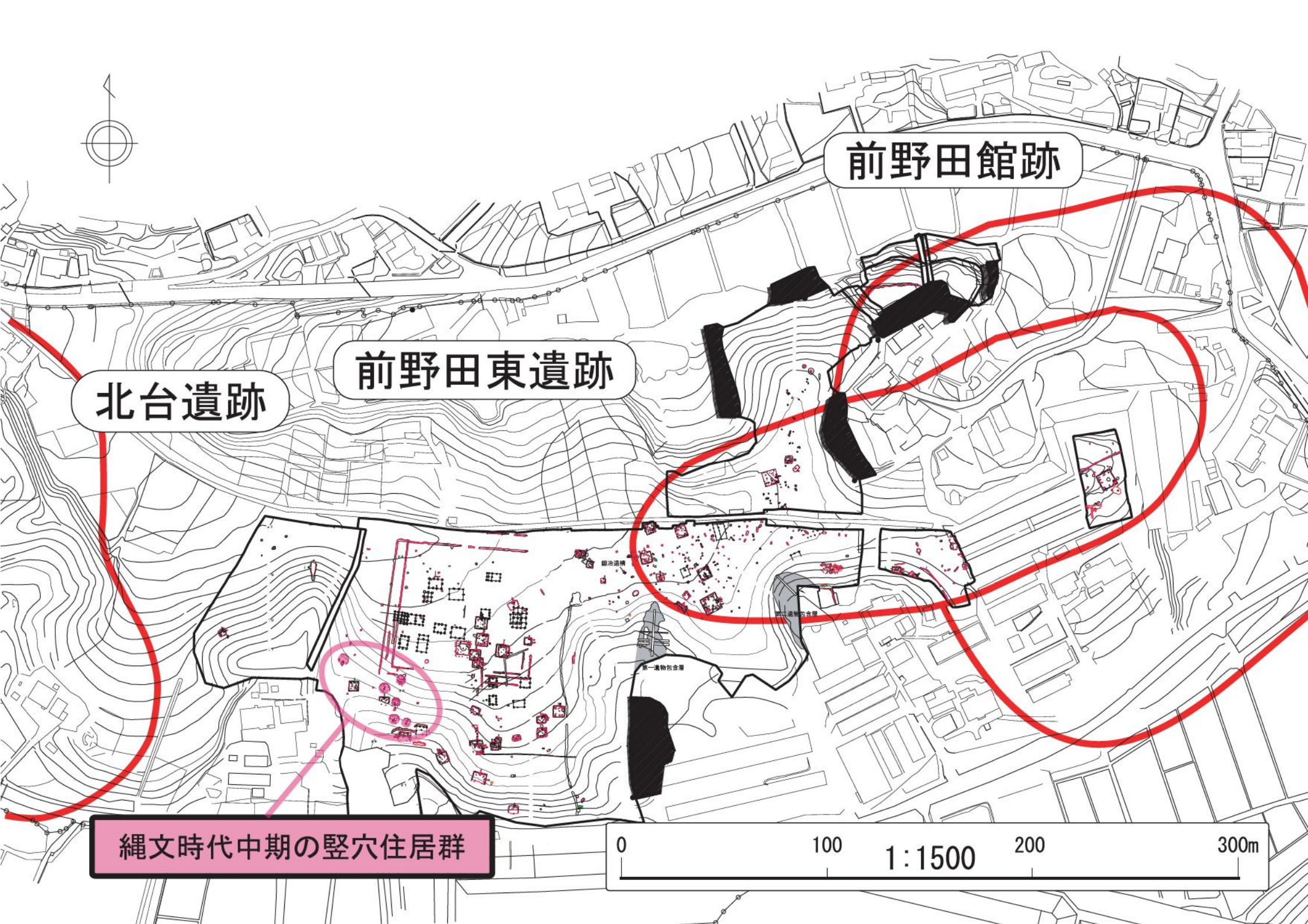
⑨【縄文中期の竪穴住居　前野田東遺跡】

今から約 15,000 年前頃から続いていた気温の上昇も、5.000 年前頃を境に下がりはじめたと考えられており、これにより当時の海岸線も徐々に現在の海岸線の方向（東側）へと後退していったと考えられています。海岸線が後退したことで現在の市街地および愛島丘陵の東端付近から岩沼市街地付近にかけての区域には、浜堤（ひんてい）と呼ばれる小高い地形が形成されました。愛島丘陵の南側は、それまで内湾状であった地形が閉じられて、大きな湖のような地形になっていたものと考えられています。また、西側の丘陵部からは、川内沢川（かわうちさわがわ）・志賀沢川（しがさわがわ）などの河川から土砂が流れ込んで、丘陵の山裾（やますそ）付近は湿地状の地形が徐々に拡がっていったものと考えられています。

(2) 今から4～5,000年前ごろ

前野田東遺跡では、縄文時代中期の終わり頃（今から約 4,500 年前頃）の竪穴式住居跡が 6 軒見つかりました。

遺跡内では平安時代の竪穴住居を中心に、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡が見つかっていますが、この時期の竪穴住居は、丘陵の南側斜面の下側でまとまって見つかっています。


前野田館跡
前野田東遺跡
北台遺跡
縄文時代中期の竪穴住居群
0
100
200
300m
1:1500

住居の中では、土器と石を組み合わせて造った複式炉（ふくしきろ）と呼ばれる炉跡が見つかりました。炉に使われた土器は深い鉢形（はちがた）の縄文土器で、内側の底付近に煤（すす）がついていたものもあり、炭などを入れていたのかもしれません。

また、土器のとなりに掘られた穴に敷（し）かれていた石には焼けた跡があり、この中で火を焚（た）いていたと考えられます。複式炉については、調理や室内を暖（あたた）める役割だけでなく、当時の人々が食べていたドングリやトチの実などの、灰汁（あく）を抜くために使う灰を作る作業なども行なわれていたのではないかと考えている人もいます。

複式炉を持つ竪穴住居跡は、この頃の東北地方南部を中心に多く見られるもので、市内では今回の調査ではじめて見つかったものです。

住居の中からは、当時使用していた土器や石器も見つかっています。

複式炉を持つ住居跡

住居から出土した土器と石器

複式炉のようす

⑩【縄文時代末から弥生時代初め頃のお墓　泉遺跡】

　泉遺跡では、縄文時代終りから弥生時代初め頃のものと思われる再葬墓（さいそうぼ）・土壙墓（どこうぼ）と呼ばれる墓跡などが見つかっています。これらの遺構は、調査区Ｖ区の西端付近の丘陵上部で見つかりましたが、同じ時期の住居跡やその他の遺構などは見つかっていないので、さらに山側の区域などに、その当時の生活場所があったのかもしれません。

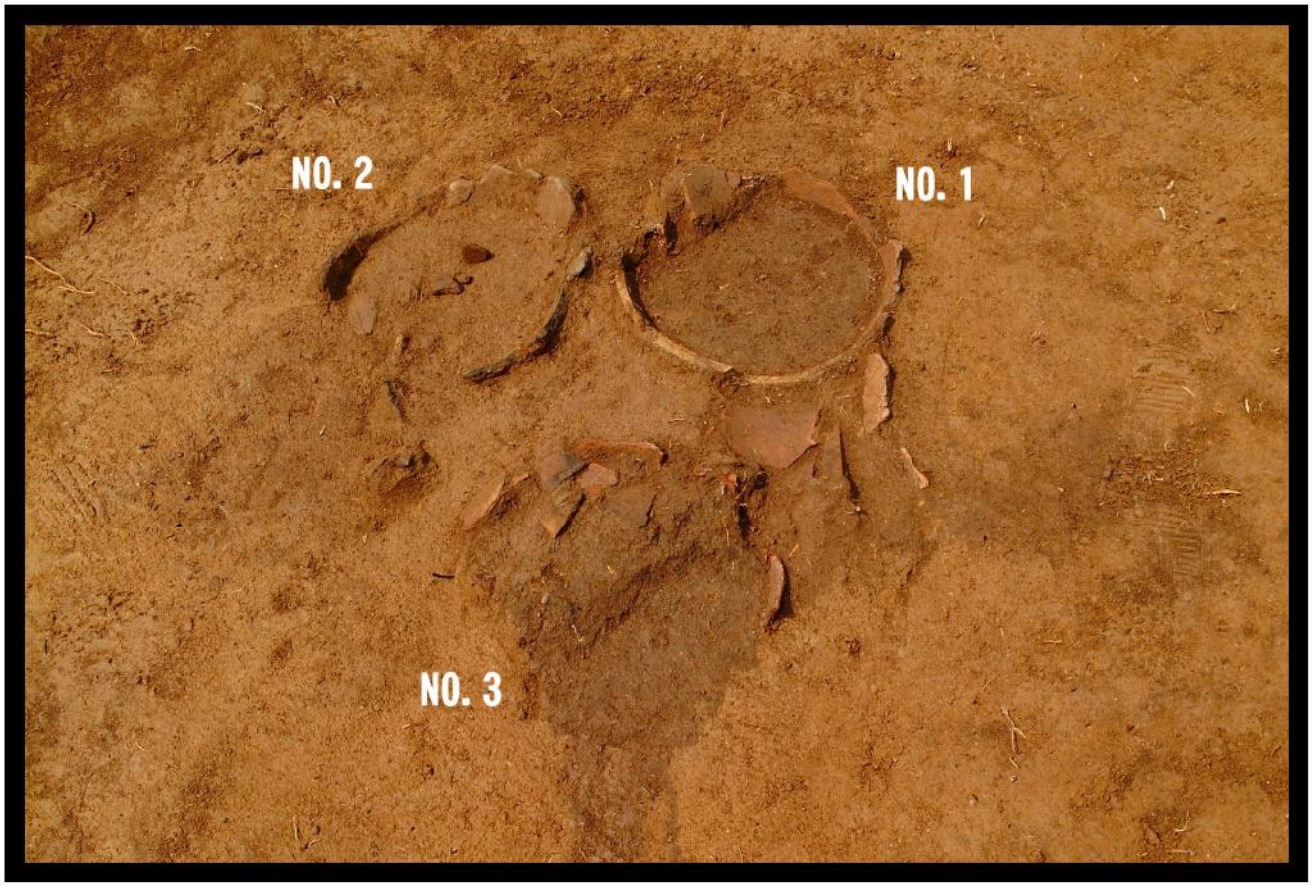
宮城県警察学校
B地点包含層
A地点包含層
H7・H8調査区
第二遺物包含層
第三遺物包含層
第一遺物包含層
泉　遺　跡
賽ノ窪27号墳
縄文時代末～弥生時代初頭
の土壙墓と再葬墓
0
50
100m
1:1000

土壙墓は、地面に掘った穴の中に直接遺体(いたい)を埋葬(まいそう)するお墓で、最も簡単で広く行なわれた埋葬の方法です。泉遺跡で見つかった土壙墓の多くは、弥生時代から後期にかけてのものですが、その中に、縄文時代終りから弥生時代初頭頃（今から約 2,300 年前頃）の土器が出土したものがありました。また、その土壙墓から 1～2.5m の位置には、再葬墓と呼ばれるお墓の跡が見つかりました。

再葬墓は、一度、土葬(どそう)などにして白骨化させた骨を、壺型の土器などに入れて再び埋葬するところから、このように呼ばれており、弥生時代初頭頃を中心とする東日本に特徴的に見られるお墓だと言われているものです。

1 つの穴の中に埋め込まれる土器は、数個から 10 個以上に及ぶこともあり、こうした穴が密集して発見される場合もあります。

土壙墓（左の２基）と再葬墓（右）



見つかった再葬墓のようす

また、発見された住居跡は大きさが3～4m前後と小規模で、遺構を見つけた地面から底面までの深さが浅いものが多い点などの共通点もありますが、大きさ・形などにばらつきがあることや、規則的な配置の柱穴などがほとんど見られないこと、炉を持つものと持たないものがあること、住居の一部分しか発見できなかったものもあることなどの不規則な点も数多くあり、その詳しい構造などについては良く分かっていません。また、これまでの発掘調査で見つかった弥生時代の住居跡の数も少ないことから、それらとの比較も難しいため、多くの謎が残されています。

⑪【弥生時代中期から後期のお墓 泉遺跡・北台遺跡】

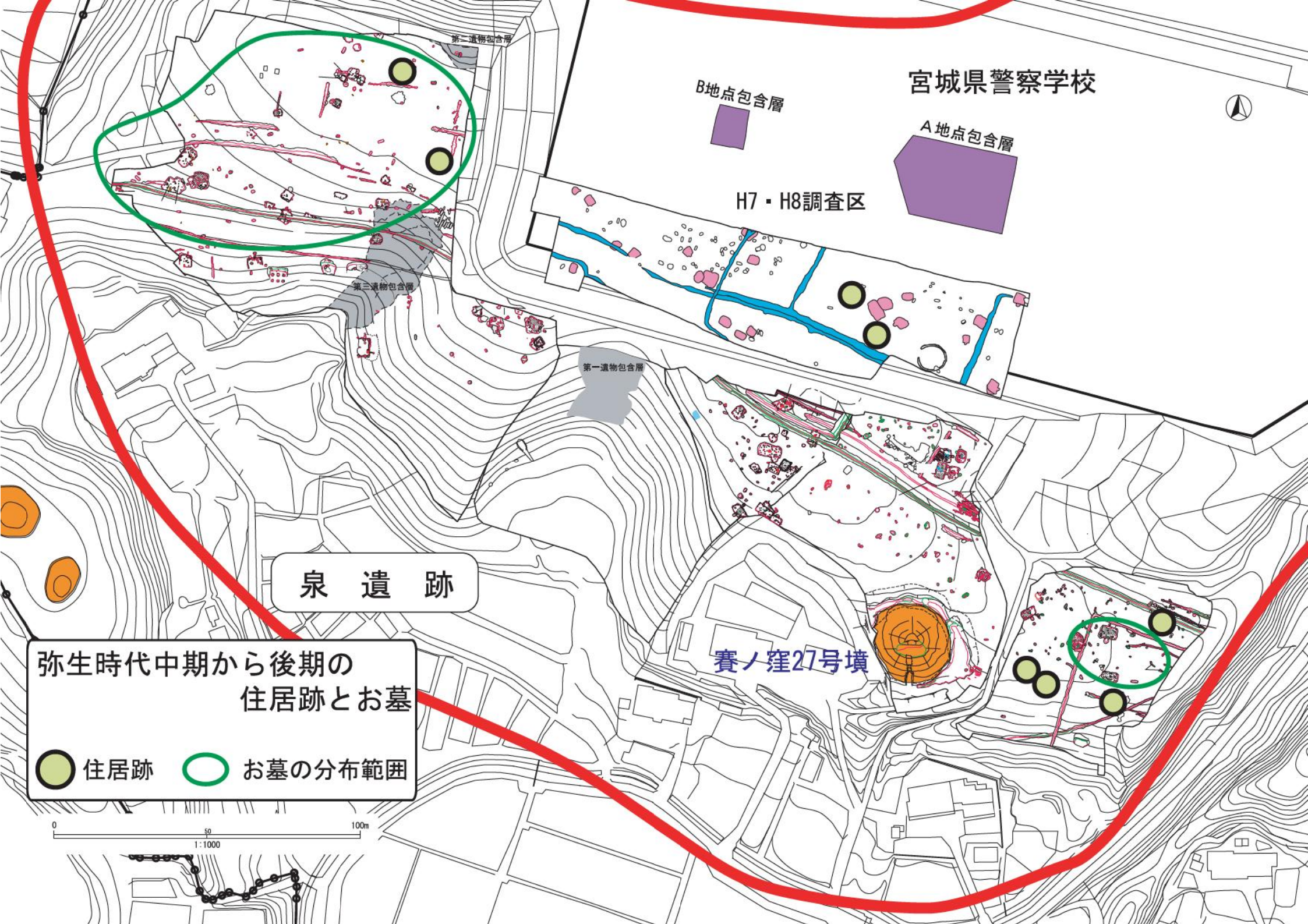
縄文時代の終り頃から弥生時代頃になると、海岸線は現在の海岸線から内陸側へ約 2.5 km付近の位置にまで後退していたものと考えられています。これにより愛島丘陵の北側区域だけでなく、現在の市街地および愛島丘陵の東端付近から岩沼市街地付近にかけて形成された浜堤の東側にも湿地状の地形が形成されていったものと考えられています。

また、愛島丘陵の南側一帯でも、川内沢川や志賀沢川の氾濫（はんらん）などによって運ばれてきた土砂が徐々に堆積（たいせき）し、湿地状の地形が山側から徐々に拡大して平野が広がりました。一方、かつて広がっていた潟湖（せきこ）は縮小して痕跡を残す程度か、または無くなってしまっていたものと思われます。

(3) 今から2～3,000年前ごろ

泉遺跡・前野田東遺跡では、弥生時代中期後半頃（今から約 2,000 年前頃）や後期（今から約 1,900 年前頃）の竪穴式住居が、北台遺跡では後期の竪穴住居跡が見つかっています。また、泉遺跡では、土壙墓や土器埋設遺構などの葬送に関係する遺構や遺物も見つかっています。

弥生時代中期から後期の竪穴住居の分布を見てみると、それぞれの遺跡で、2～3 軒程のまとまりで見つかっている場合が多く、1 軒だけ単独で見つかっているものもあるなど、大きなまとまりは無いようです。

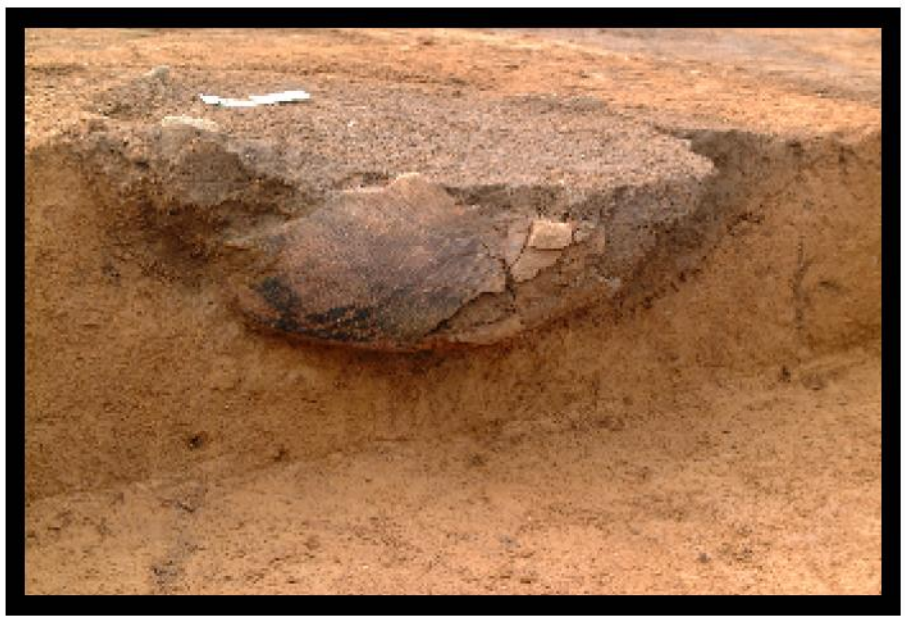

宮城県警察学校
B地点包含層
A地点包含層
H7・H8調査区
第二遺物包含層
第三遺物包含層
第一遺物包含層
泉　遺　跡
賽ノ窪27号墳
弥生時代中期から後期の
住居跡とお墓
住居跡
お墓の分布範囲
0
50
100m
1:1000

また、発見された住居跡は大きさが3～4m前後と小規模で、遺構を見つけた地面から底面までの深さが浅いものが多い点などの共通点もありますが、大きさ・形などにばらつきがあることや、規則的な配置の柱穴などがほとんど見られないこと、炉を持つものと持たないものがあること、住居の一部分しか発見できなかったものもあることなどの不規則な点も数多くあり、その詳しい構造などについては良く分かっていません。また、これまでの発掘調査で見つかった弥生時代の住居跡の数も少ないことから、それらとの比較も難しいため、多くの謎が残されています。

弥生時代後期の竪穴住居跡

出土した後期の土器

泉遺跡の調査区東西両端にあたるＩ区とＶ区では、弥生時代中期後半頃から後期頃にかけてのお墓が多数見つかりました。見つかったお墓には、土壙墓と土器埋設遺構の２種類があります。土器埋設遺構は、大型の壷形土器の中に嬰児（えいじ）や幼児などの遺体・骨等を入れて埋葬したものの可能性があるもので、実際に骨などは見つかりませんでしたが、お墓の一種であると思われます。また、土壙墓の中には遺体と一緒に埋められた副葬品（ふくそうひん）などが見つかっているものがあり、首飾（くびかざ）りなどに使われる管玉（くだたま）が出土したものや、稲の穂を摘（つ）み取る道具である石包丁（いしぼうちょう）が出土した珍しいものもあります。この他にも遺跡内からは、稲の根刈りに使われたと思われる板状の石器等も見つかっていることなどから、付近の丘陵裾（すそ）などに広がる湿地で稲作が行なわれていたのかもしれません。



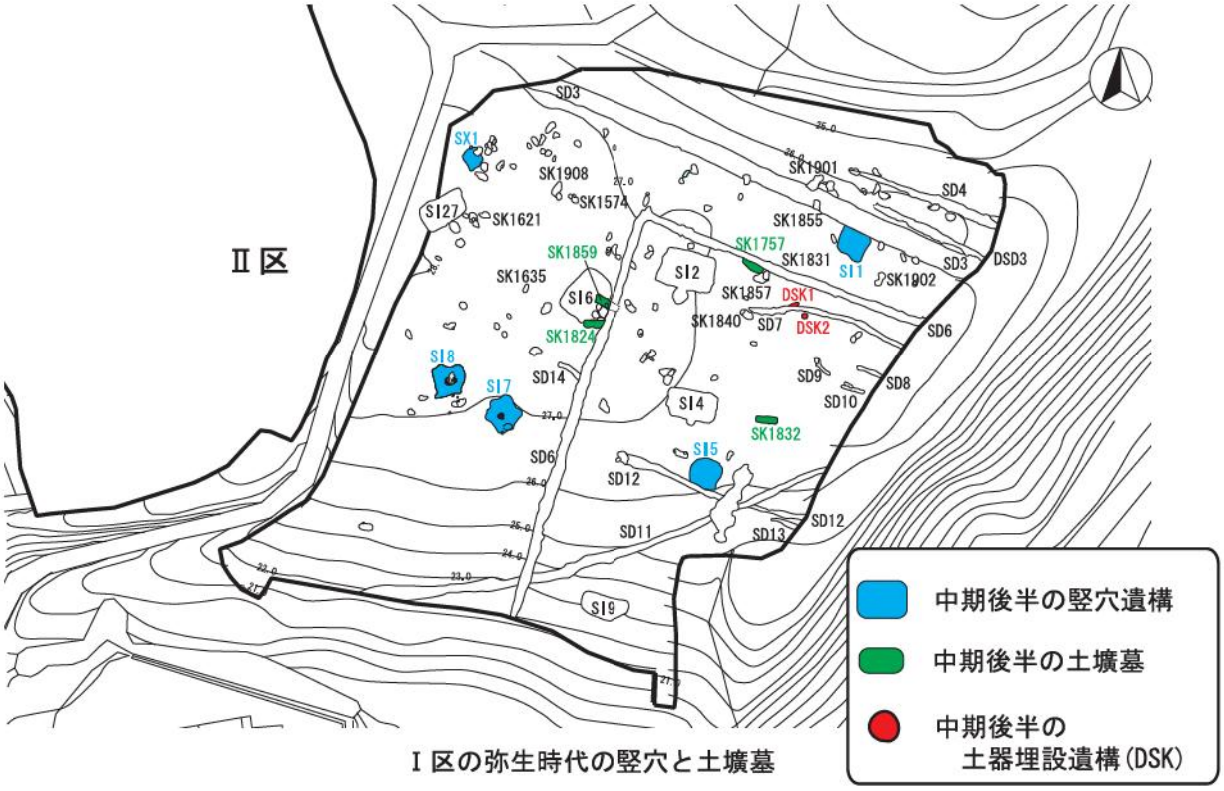
土器埋設遺構

土　壙　墓

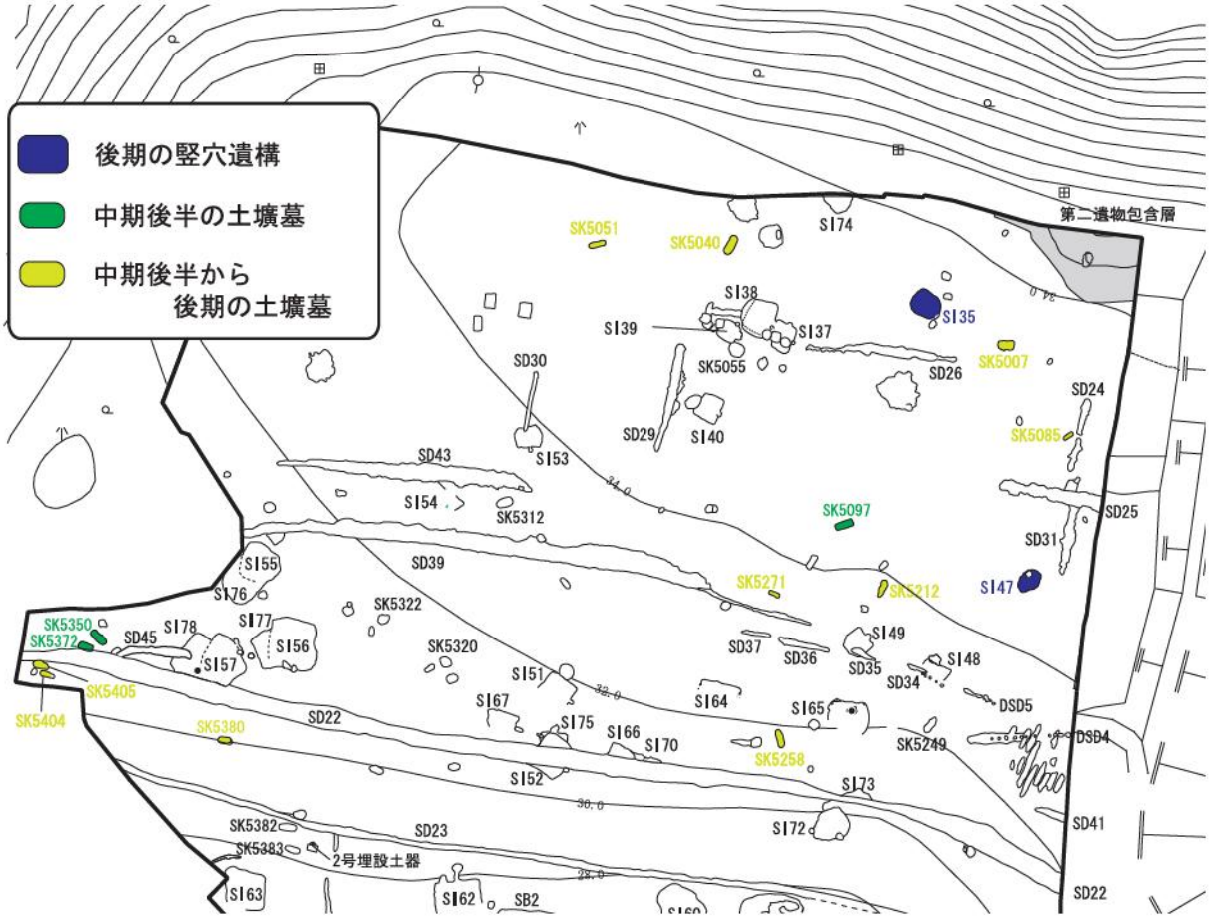
土壙墓の出土品（左：管玉　右：石包丁）

Ⅰ区では、弥生時代中期の住居跡と土壙墓・土器埋設遺構が比較的近くで見つかっており、これらの家の関係者が葬（ほうむ）られたものの可能性があります。一方、Ⅴ区では、後期の竪穴住居跡2軒と13基の土壙墓が見つかっていますが、造られた年代が明確な土壙墓は中期の土器が出土した3基だけで、その他のものの中には後期のものを含んでいる可能性もあります。また、中期に造られたことが明らかな竪穴住居跡も近くに無いことから、住居跡とお墓の跡との詳細な関係は不明であり、Ⅰ区でのあり方とも様子が異なっています。なぜこのような違いがあるのか詳細は分かりませんが、調査区域の外側に未確認の住居跡がある可能性や、もともとお墓の近くにあった住居跡が、これまでの土地利用によって削られて無くなってしまい調査で見つからなかった可能性なども考えられます。

弥生時代中期の土壙墓と出土した土器



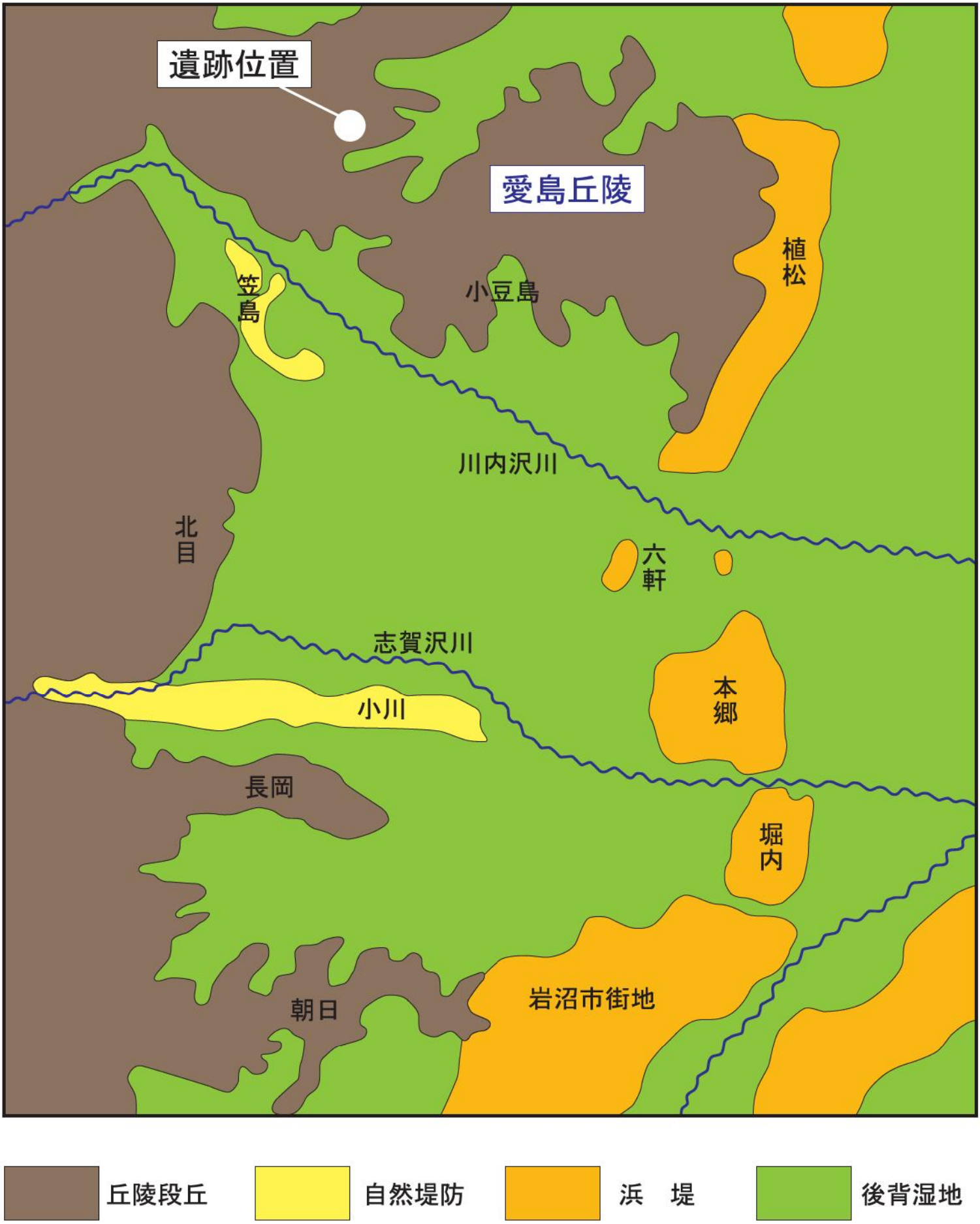
Ⅰ区の弥生時代の竪穴と土壙墓



Ⅴ区の弥生時代の竪穴と土壙墓

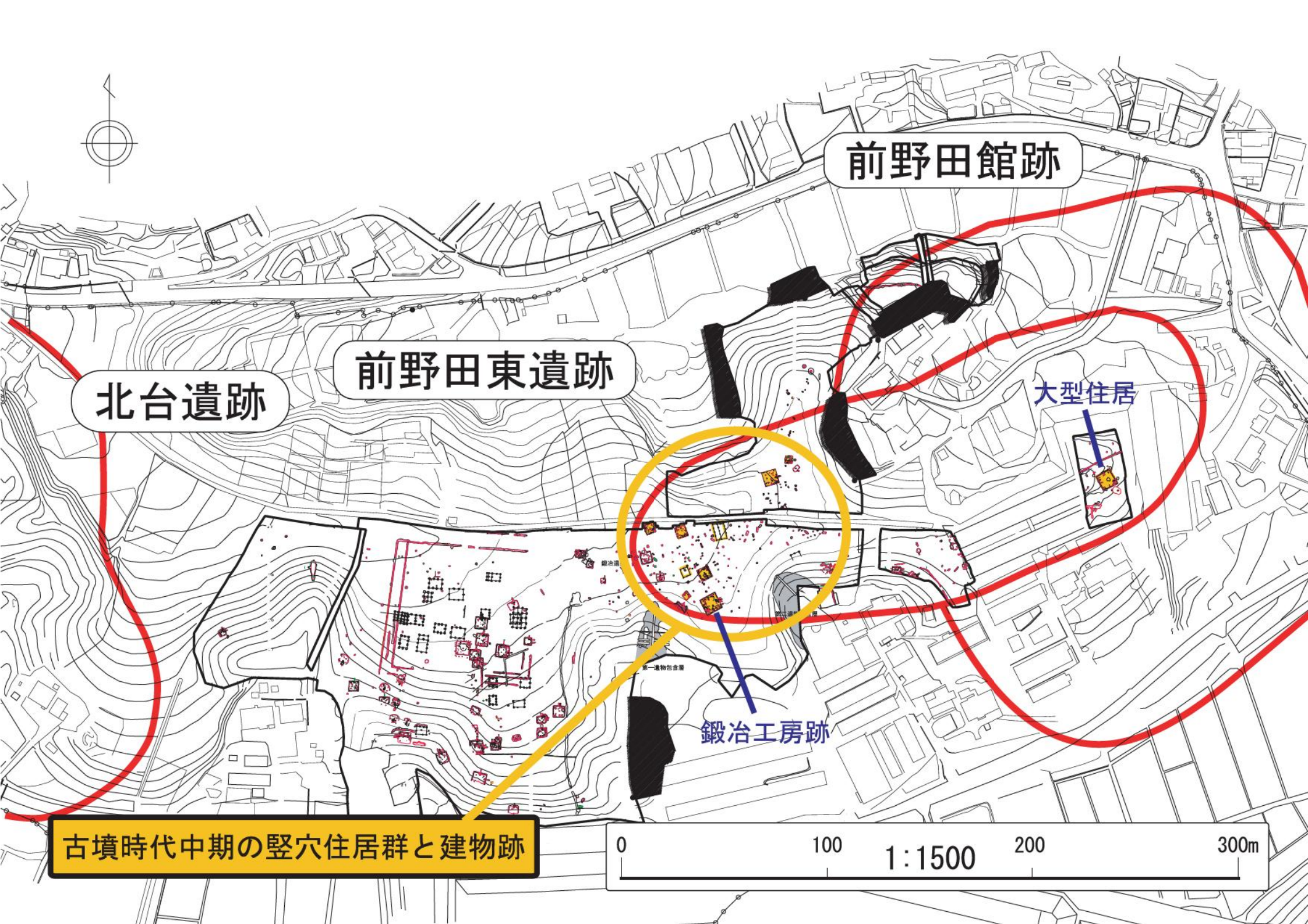
⑫【古墳時代中期の大型住居跡と鉄製品づくりの作業場　前野田東遺跡】

古墳時代には、海岸線は既（すで）にほぼ現在の位置付近にまで後退していたと考えられており、私達がイメージする名取の地形に近い様子になっていたものと思われます。遺跡も前代よりもさらに平野部への進出が見られるようになり、現在の海岸線の西側数キロメートル付近にまで遺跡の分布範囲がひろがります。当時の人々が、より生産性の高い土地を求めて平野部へと生活の場所を移していった様子が伺われます。新たな土地で生活をはじめる時に、最初にやらなければいけなかったのは、家を建てる場所を選ぶことだったのではないでしょうか？ 私達より強い自然との結びつきの中で生活していた当時の人々にとって、家や村をつくる場所選びは重要だったことでしょう。平野部の遺跡の分布を見てみると、浜堤の上や、河川の氾濫などによって形成された自然堤防の上など、周囲の地形よりもやや小高い場所に多く認められます。そのような地形の背後には、後背湿地と呼ばれる低湿地が広がっている場合が多く、河川氾濫などの自然災害の危険をさけながらも、安定した水田耕作を行なうことが可能なため、生活の拠点とするのに絶好の場所だったのではないでしょうか？ この頃になると愛島丘陵の北側だけでなく、南側の区域に流れる河川の周囲にも、自然堤防の発達が見られるようになり、少しずつ遺跡の分布も広がっていったものと思われます。


遺跡位置
愛島丘陵
植松
小豆島
笠島
川内沢川
北目
六軒
志賀沢川
本郷
小川
長岡
堀内
朝日
岩沼市街地
丘陵段丘
自然堤防
浜　堤
後背湿地

(4) 現　　在

前野田東遺跡では、調査区東側のⅤ区からⅥ区にかけての丘陵上や東端のⅢ区で、古墳時代中期（今から約 1,500 年前頃）の竪穴住居跡 8 軒や建物の跡 2 棟が見つかっています。古墳時代の遺構や遺物は、Ⅴ区からⅥ区に比較的まとまって分布しており、同じ集団に属する人々が居住したものであったと思われます。


前野田館跡
前野田東遺跡
北台遺跡
大型住居
鍛冶工房跡
古墳時代中期の竪穴住居群と建物跡
0
100
200
300m
1:1500

Ⅲ区の大型住居跡

出土した土師器（赤茶色）と須恵器（灰色）

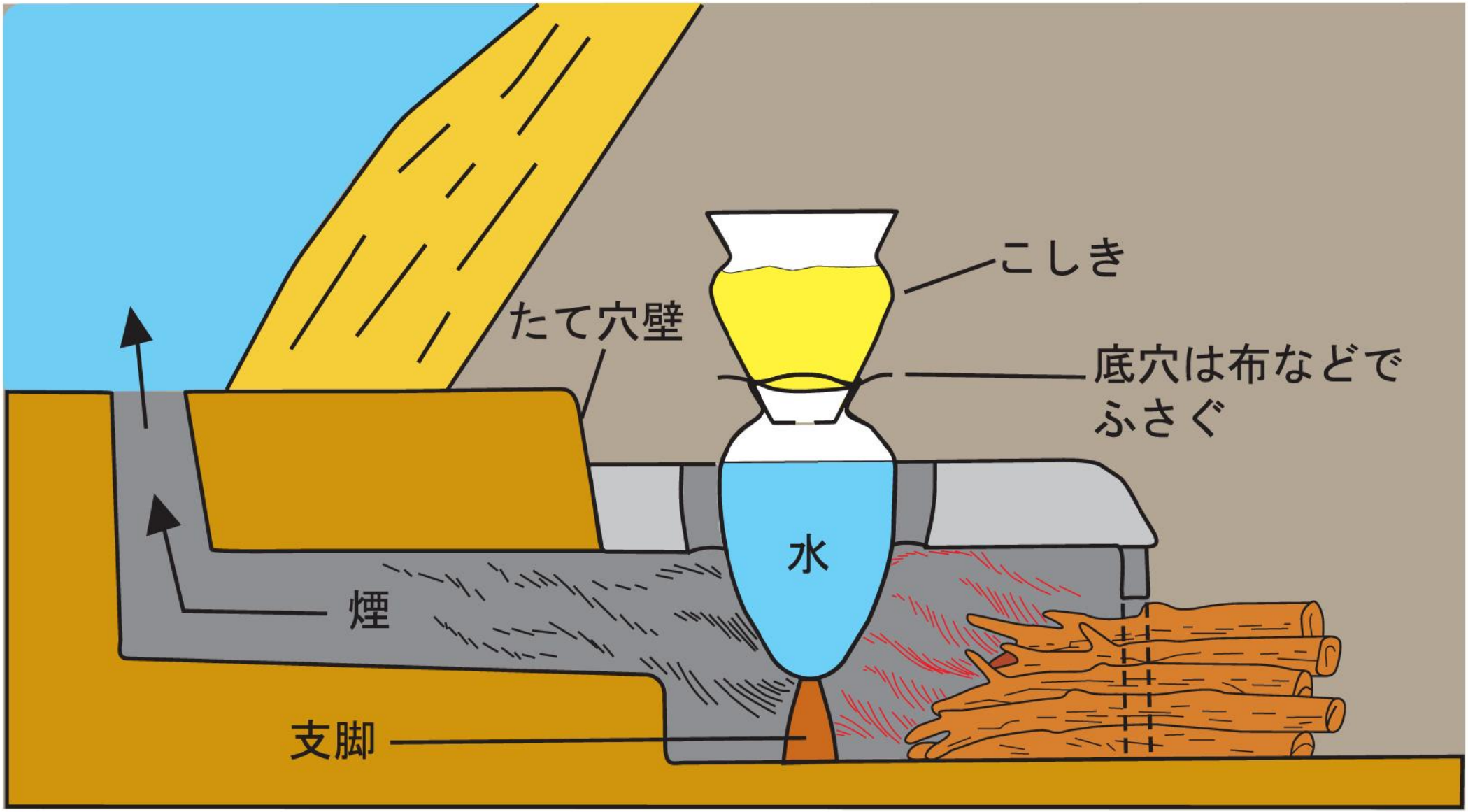
この時期の竪穴住居は、正方形や長方形で一辺が 4m～6m 前後の大きさのものが一般的に多く見られますが、前野田東遺跡では一辺がおよそ 8m～9m の、当時としては最大クラスの竪穴住居跡が 2 軒見つかっています。写真は調査区東端のⅢ区で見つかった大型の竪穴住居跡で、壁からやや内側の位置に規則的にならんだ屋根を支える柱の跡や、部屋の中を仕切るための溝、カマドの跡、多くの土器などが見つかりました。

出土した土器には、屋外でそのまま野焼きされた土師器（はじき）と呼ばれる赤茶色の土器や、古墳時代に朝鮮半島から伝わった、丘陵の斜面などに穿窯（あながま）と呼ばれる窯（かま）を造り、その中で土器を焼く技術で生産された須恵器（すえき）と呼ばれる灰色で硬質（こうしつ）の土器があります。そのような技術が伝わってからそれほど時間が経過していないこともあるためか、県内でも古墳時代中期頃の遺跡で見つかる須恵器の数はあまり多くありません。この時期の須恵器が出土している遺跡は、大きな古墳やその周りの古墳、古墳周辺の大きな村、特殊な技術を持った人々がいた村など、通常とはやや異なる性格の遺跡である場合が多いようです。

竪穴住居跡の中には、壁際にカマドが据え付けられているものがありました。県内では、そのような竪穴住居が多く見られるようになるのは、およそ古墳時代半ば以降であると考えられています。カマドは白色の粘土を使って造られたものや、板状の石などを組み合わせて造られたものなどがありました。また、1軒の住居中に複数のカマドの跡が見つかったものもあります。これらは壊れて使用できなくなったカマドと、別の場所に新しく付けかえたカマドの両方の跡が見つかっているためです。住居内のカマドの焚口（たきぐち）付近や内部は、土が焼けて赤く変色したり、固く焼けしまったりしていました。この中からは煮炊（にた）きに使用されていたと思われる土器や、カマド内に据えて下から土器などを支える支脚（しきゃく）と呼ばれる道具などが見つかっています。支脚には石製や土製のものがあり、中には高坏（たかつき）と呼ばれる土器を支脚として使っている住居跡もありました。

住居内のカマド（左：白色粘土のカマド　右：石組みのカマド）

カマドの支脚（左：土製の支脚　右：土器を転用した支脚）



かまど模式図

調査区Ⅴ区でも、Ⅲ区のものとほぼ同じ大きさの大型竪穴が見つかりました。その竪穴の内部からは、鉄の生産に関わる鍛冶（かじ）という作業を行なっていたと考えられる作業場が見つかっています。実際の作業スペースは、西壁中央の 3m 四方程度の広さで、両側は間仕切りの小溝で区切られていました。この空間の中からは、火を焚（た）いた 2 ヶ所の炉跡や、炉に風を送って火の勢いを強くするために使われるフイゴと呼ばれる道具に付けられた羽口（はぐち）、炉で加熱した鉄製品や鉄素材などを加工する際の台である金床石（かなとこいし）などが発見されました。

炉は床から 10 cmほど椀（わん）状に掘り窪めた径 50 cm前後の円形状で、底面は焼けて赤く変色し、鉄を加熱した際などに出る鉄滓（てっさい）（鉄のかす）なども少量見つかっています。また、炉の脇で見つかった金床石の表面には、加熱した鉄を鎚（つち）などでたたいて鍛（きた）える鍛錬鍛冶（たんれんかじ）の作業などで付いたと思われる鉄の痕跡が残っていました。出土したフイゴの羽口は、先端部分が熱で変色し溶けている部分があるなど、実際に使用された跡が見られます。

これらのことから、この大型竪穴は鍛冶作業を行なっていた工房跡（こうぼうあと）だと考えられます。鍛冶作業のためには砂鉄（さてつ）や、磁鉄鉱（じてっこう）と呼ばれる鉄を含んだ石などから鉄の素材を作り出すか、どこからか鉄の素材を入手する必要があります。この当時それが可能であったのは、ごく限られた人々だったのでしょう。この頃の鍛冶工房跡が見つかっている遺跡の数も多くありません。また、こうした工房跡からは、勾玉（まがたま）や臼玉（うすだま）などの玉類、比較的やわらかい石材で鏡・刀・勾玉などの形をまねて作られた石製模造品（せきせいもぞうひん）と呼ばれる石製品などが一緒に出土する場合が多くあります。本遺跡の鍛冶工房跡からも、臼玉や石製模造品が一緒に見つかっています。

鍛冶工房跡のようす

鍛冶作業場所のようす

鍛冶をするための炉跡

使われていた金床石

フイゴの羽口

臼玉と石製模造品

⑬【賽ノ窪27号墳と副葬品】

賽ノ窪古墳群は、高舘丘陵（標高200m前後）から分かれ、東へ張り出す標高30～50mの愛島丘陵上に30基程が分布しています。古墳群は、既に無くなった（6基）ものや、まだ発掘されていない古墳が多く、詳しいこと分かっていませんが、大まかに第1号墳の名取大塚山古墳（全長90mの前方後円墳）を中心とした埴輪などが伴う円墳群と、第17号墳の十石上古墳（全長32mの前方後円墳）を中心とした箱式石棺などが検出されている小円墳群に分かれると考えられています。古墳群の時期については、古墳の特徴から前者は古墳時代中期（5世紀頃）、後者は古墳時代後期（6世紀頃）を中心とした時期と推定されていますが、そのあり方や関連性については、まだ分かっていません。

塞ノ窪古墳群全体図

21号墳跡
(湮滅)
18号墳旗塚跡
(湮滅)
17号墳
(十石上古墳)
14号墳
(茂平塚古墳)
19号墳
22号墳
20号墳
15号墳
16号墳
25号墳跡
(湮滅)
28号墳跡(湮滅)
12号墳
13号墳
名取大塚山古墳(1号墳)
24号墳
2号墳
3号墳
4号墳
5号墳
6号墳
7号墳
8号墳
9号墳
10号墳
11号墳
30号墳
29号墳
23号墳跡(湮滅)
27号墳

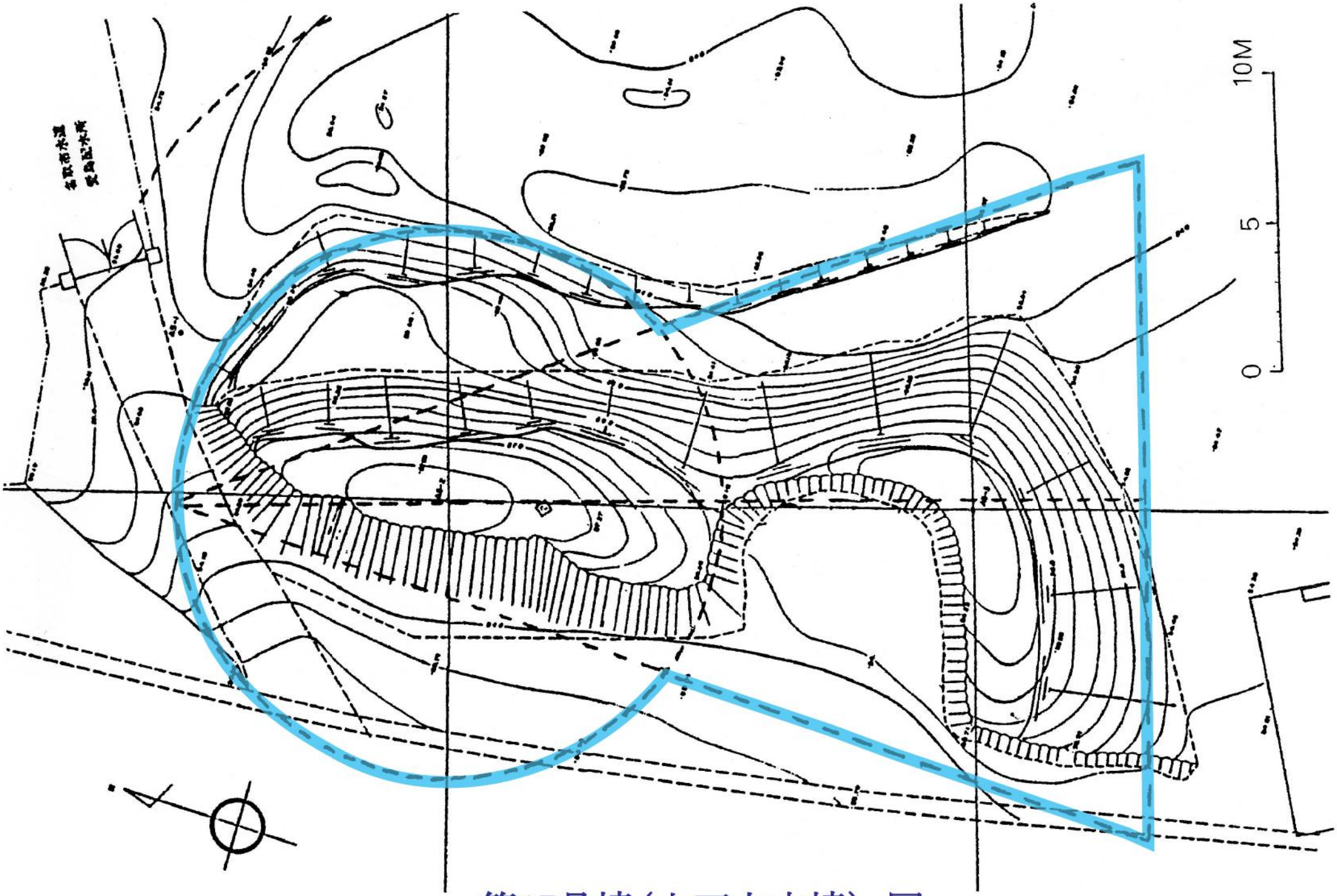
名取大塚山古墳

名取大塚山古墳(第１号墳)は、全長 90m、後円部径 60m・高さ 8.5m、前方部の長さ 30m・高さ 2.3m の前方後円墳で、県内で４番目に大きな古墳となっています。後円部は三段築成で埴輪や葺石を伴い、前方部は後円部に比べて極端に低くなっています。このような形の前方後円墳は、帆立貝式、又は柄鏡式古墳と呼ばれています。古墳の年代については、発掘調査が行われていないため明らかではありませんが、古墳の形や発見された埴輪などから推定すると、5 世紀中頃（古墳時代中期）に造られたと考えられています。

第1号墳（名取大塚山古墳）図

十石上古墳

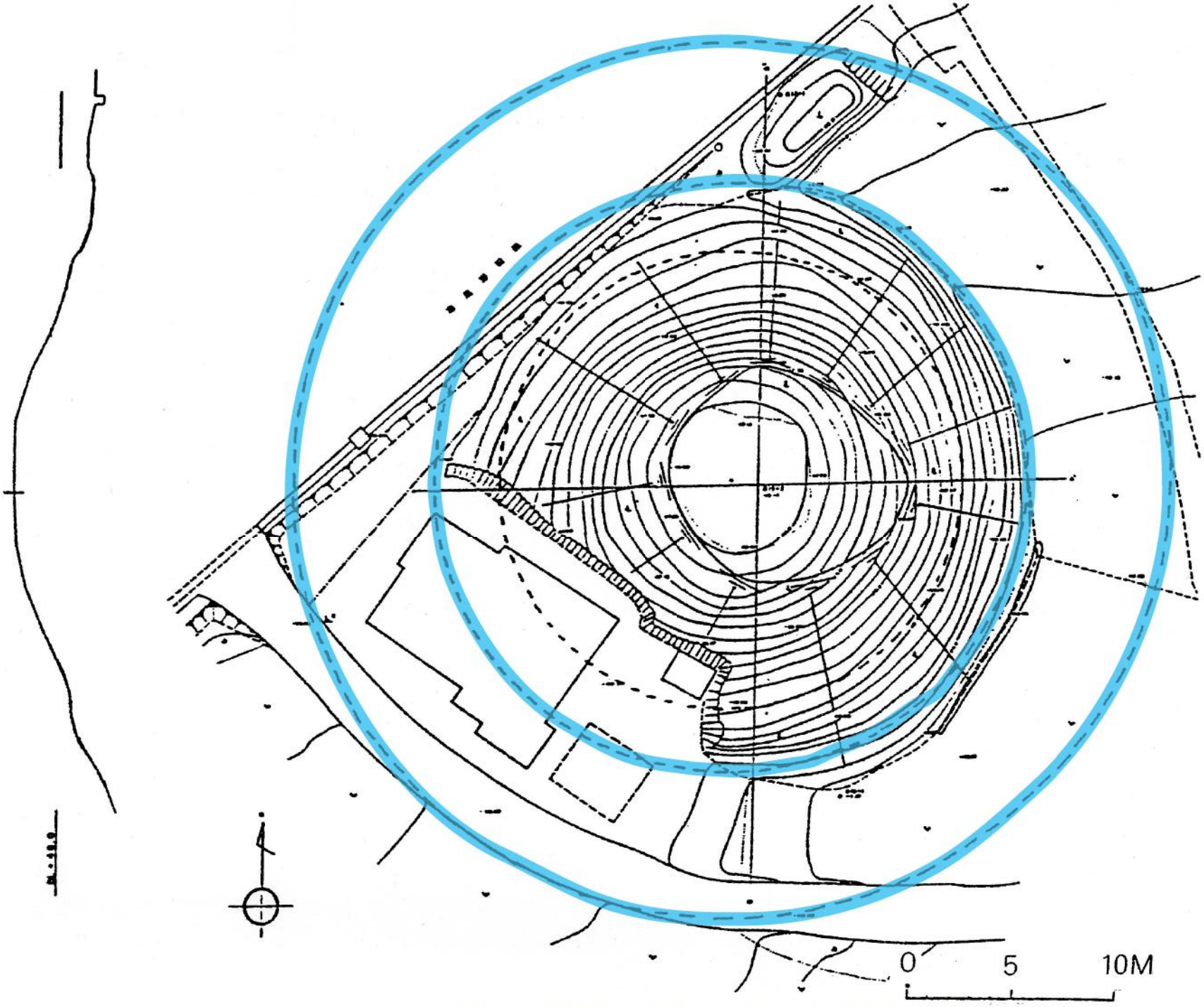
十石上古墳(第17号墳)は前方後円墳ですが、県道仙台・岩沼線の工事等で墳丘の西側が壊され、墳丘は主軸に沿って東側半分程しか残っておらず著しく形状が変形しています。残存部から全長32m、後円部径18m・高さ3.8m、前方部の長さ14m・高さ2.3mと推定されます。この古墳は、名取大塚山古墳(第1号墳:前方後円墳)、茂平塚古墳(第14号墳)等を除けば、古墳時代後期(6世紀)の賽ノ窪古墳群(群集墳)の中心になると推定されています。なお、壊された墳丘部の主体部から石棺等が発見されていないことから、木棺に直接埋葬されていた可能性が高いと考えられていています。



第17号墳(十石上古墳) 図

茂平塚古墳

茂平塚古墳(第14号墳)は名取大塚山古墳(第1号墳)と谷を挟んだ北側の丘陵上に位置し、墳丘の北西側の一部が民家により壊されています。古墳は墳径28m、高さ4.5mの二段築成、墳丘上部一段目の直径16m、6～7mの周湟を有する大型の円墳です。なお、墳丘一段目と二段目の境に埴輪が廻り、発見された遺物から円筒と朝顔形の二種類の埴輪があることが確認されています。古墳が造られた時期は、埴輪などから名取大塚山古墳と同じ5世紀中頃(古墳時代中期)で、同古墳との関連性が推測されています。



第14号墳（茂平塚古墳）図

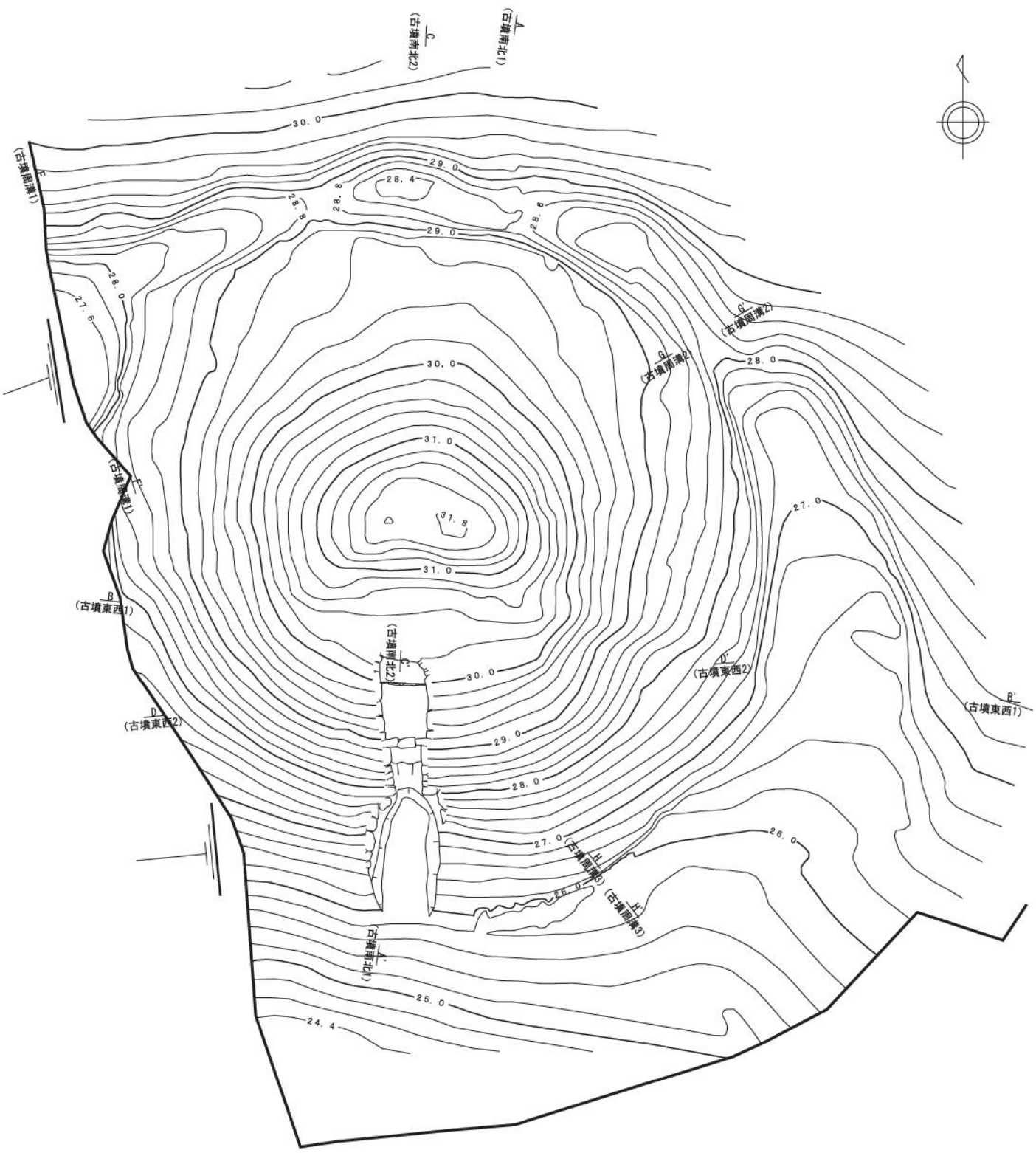
名取大塚山古墳のようす

十石上古墳のようす

茂平塚古墳のようす

第27号墳(賽ノ窪古墳群)

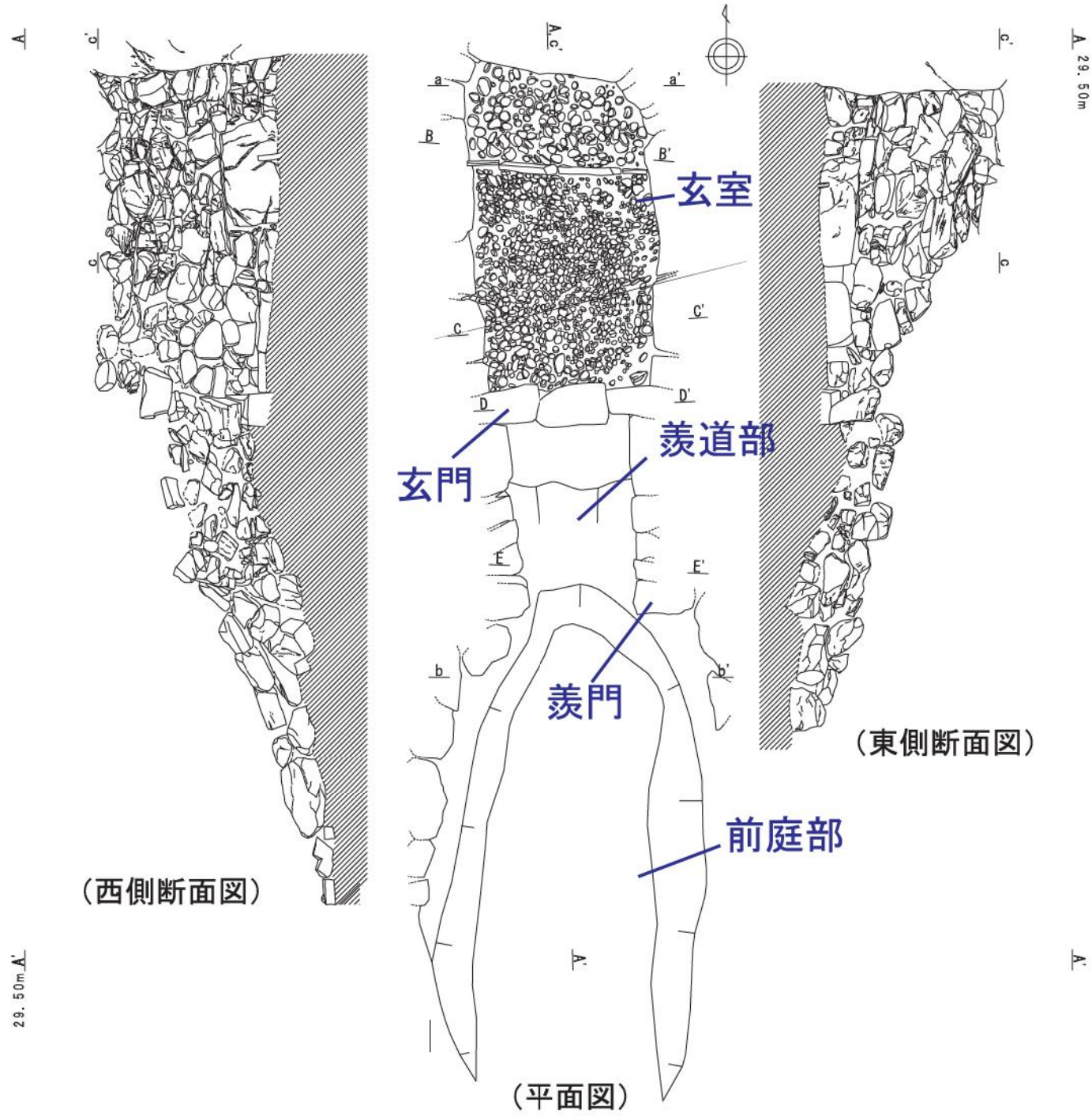
第27号墳は賽ノ窪古墳群が分布する丘陵部の東端に位置し、最も近い第8号墳から約300m離れた場所に単独で立地しています。今回の発掘調査により、古墳は直径26m、高さ約4mの円墳で、主体部は玄室(奥行3m・幅1m)・羨道・羨門・前庭部から構成され、石室の全長7.9mを計る横穴式石室であることが確認されました。横穴式石室を持つ古墳としては、名取市内で山囲古墳(飯野坂地区)に次ぐ2例目となるものです。調査の結果、石室全体は後世の盗掘により荒らされていましたが、土師器・須恵器等の供えた器類の他、鉄製品として刀・鏃・鉾等の武器類や轡等の馬具類が発見されました。古墳の年代は、出土した遺物や石室の構造等の特徴から、7世紀中頃以降には築造されていたと考えられ、名取大塚山古墳や十石上古墳より新しく、賽ノ窪古墳群の中でも最も新しい時期に位置付けられます。このような古墳の特徴から、古墳に埋葬された人物は、この一体の律令体制整備に深くかかわり、地域全体で中心的な役割を果たした者であったと推測されています。



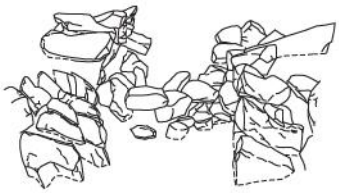
1:150

0 5 10m

27号墳現況と石室の位置図



玄室奥壁（南から）



羨門及び羨道部閉塞石
（南から）

玄室天井（下から）

0 1 2m
1:40

第27号墳の石室図

古墳の調査前の状況

古墳周溝の堆積土を堀り上げた状況

古墳の表土と周溝の土を取り除いた状況

石室の入口が見つかった状況

石室の構築方法

①【石室の掘り方】

石室を構築するにあたって、墳丘の積土を盛る前に旧表土の表面をならし、浅めの掘り込み(一次掘り方)を行ってから、本掘り(二次掘り方)が行なわれています。

②【基底石】

大きく重い奥壁部分では、安定や高さ調整のため掘り方に基底石を咬ませ落ち着かせて、位置が確定した後に石室の平面に基づいて玄室の側壁と玄門の袖石等の基底石を掘り方底面に据えています。その後、羨道部から前庭部に至る側壁の基底石が掘り方底面に据えられるが、全体が平坦になるように土を置いたり石を咬ませたりし、基底石どうしの間には割石を詰め込み隙間をなくしています。

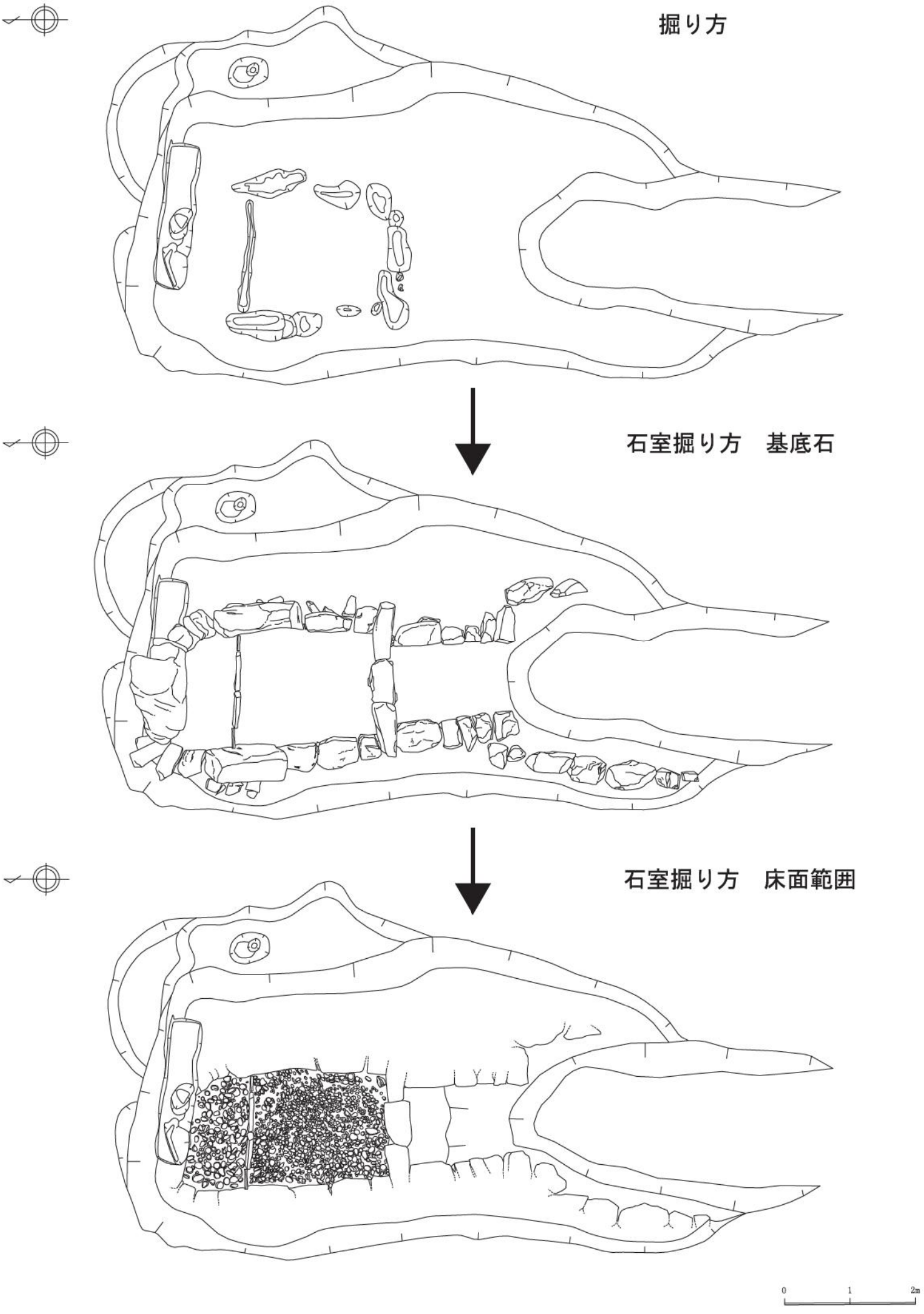
③【側　壁】

側壁は割石を持ち送り手法によって積み上げて天井石へと接続させ、側壁や奥壁と天井石が接合する部分の隙間には、板状の割石を詰め込んでいる。なお、天井石を固定するために白色粘土が貼られており、次の作業段階の墳丘構築の準備をしています。

④【床　面】

玄室では仕切り石により南北に分かれ、共に小さな円礫により敷石されていますが、敷石の安定のため下に白色粘土や褐色土が敷かれています。

羨道部では、床面をスロープ状にするため、白色粘土と褐色土を交互に貼り固め、前庭部では、地山を掘り込み船底状の窪みが構築されています。


掘り方
石室掘り方　基底石
石室掘り方　床面範囲
0
1
2m

墳丘の積土(盛った土)の状況①【南北方向】

墳丘の積土の状況②【東西方向】

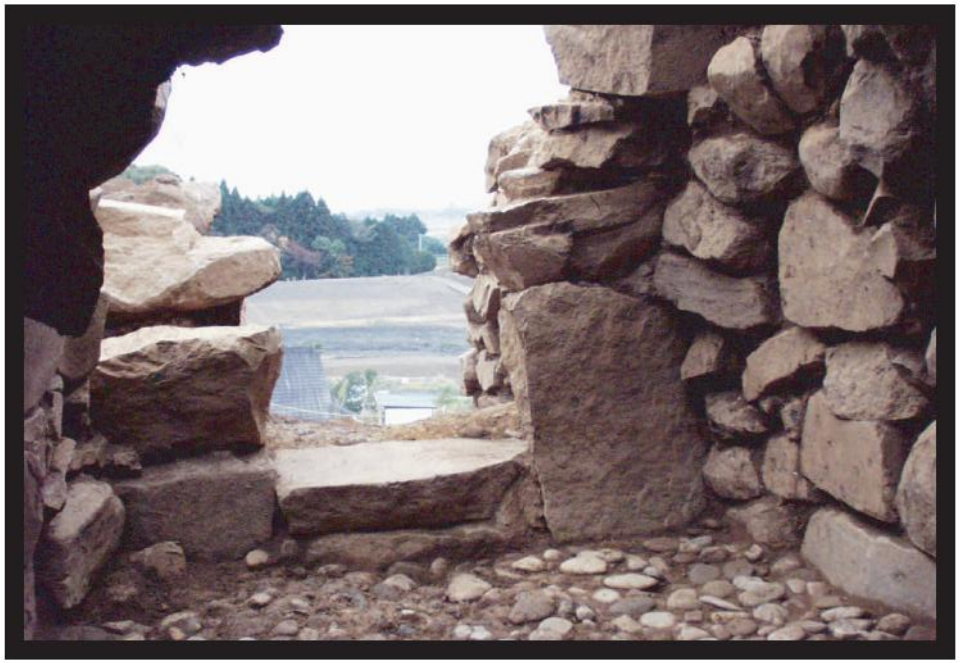
積土を除去した石室の状況

石室の基底石(土台となる石)の状況①【羨道部】

玄門（埋葬部屋の入口）の状況

玄室（埋葬部屋）の内部の状況

玄室の奥壁の状況

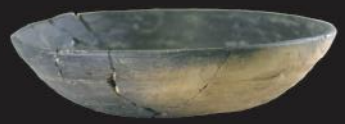


玄室内から外側を似た状況

石室の基底石の状況②【玄室】

石室の基底石を除去した状況

27号墳全体の規模と人との比較



坏(つき)

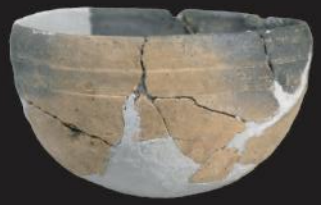
坏(つき)

坏(つき)

-底面-

坏(つき)

碗(わん)



碗(わん)

碗(わん)

坏(つき)

坏(つき)

坏(つき)

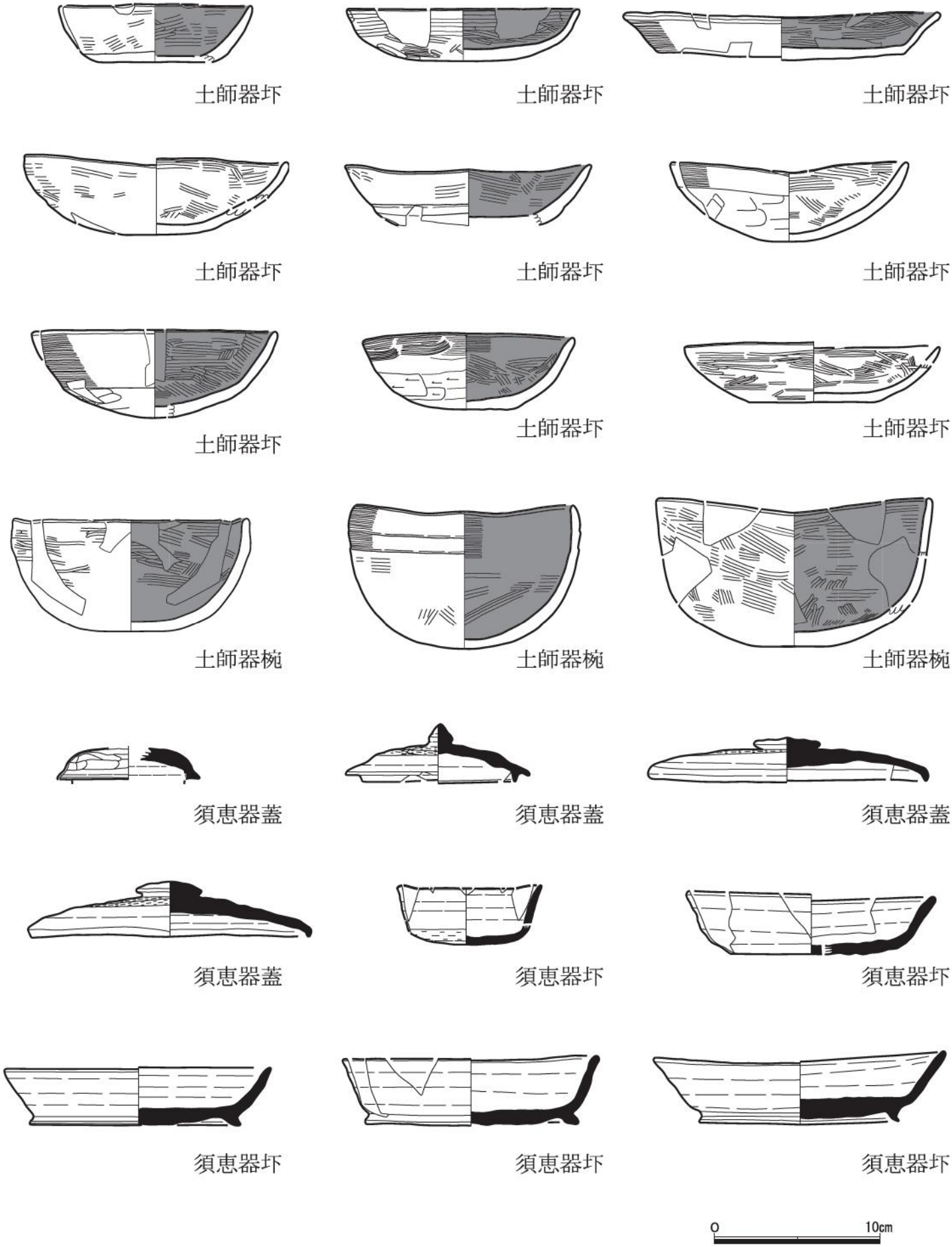
坏(つき)

坏(つき)

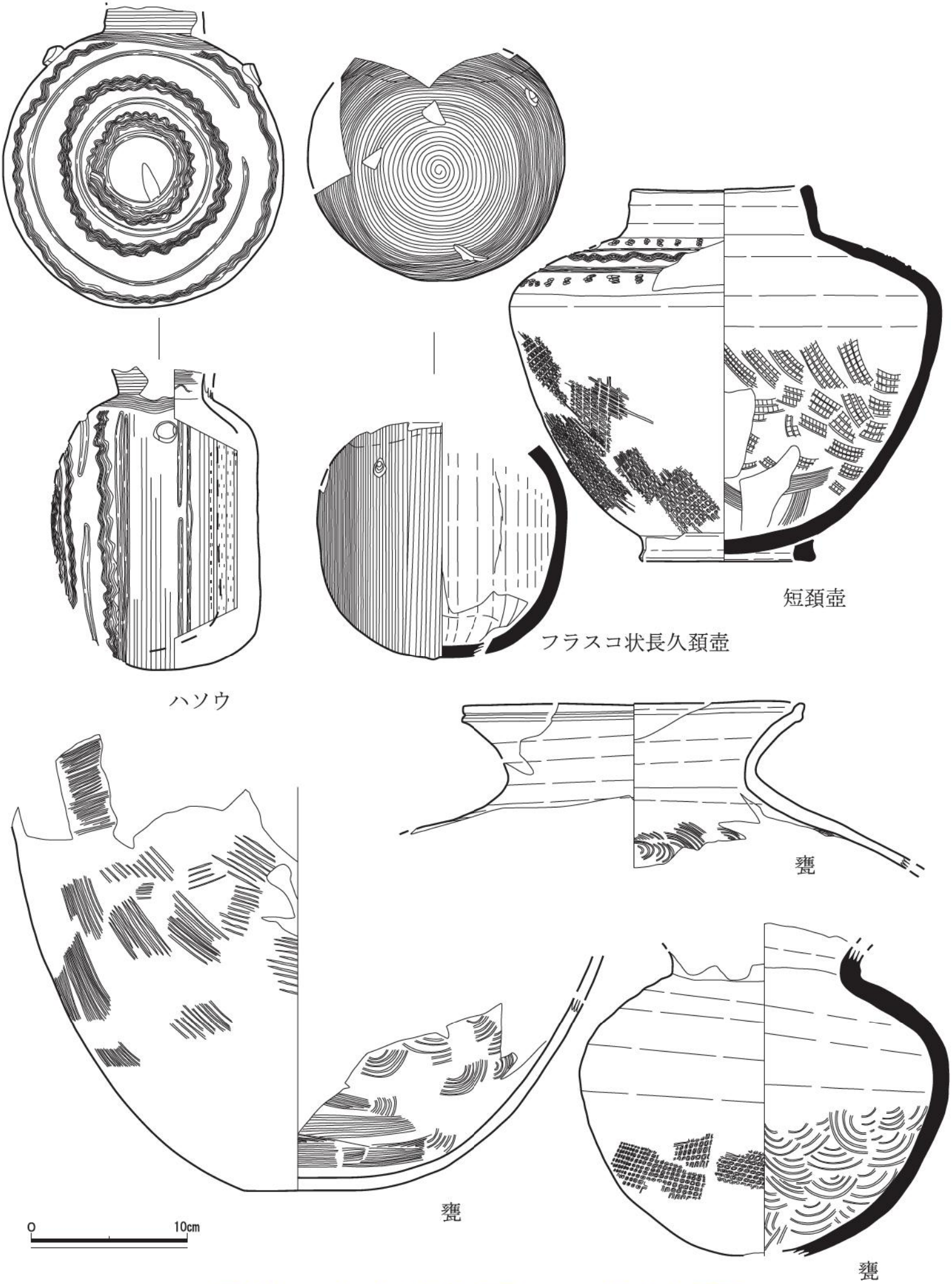
坏(つき)

27号墳から出土した遺物①　【土師器(はじき)】

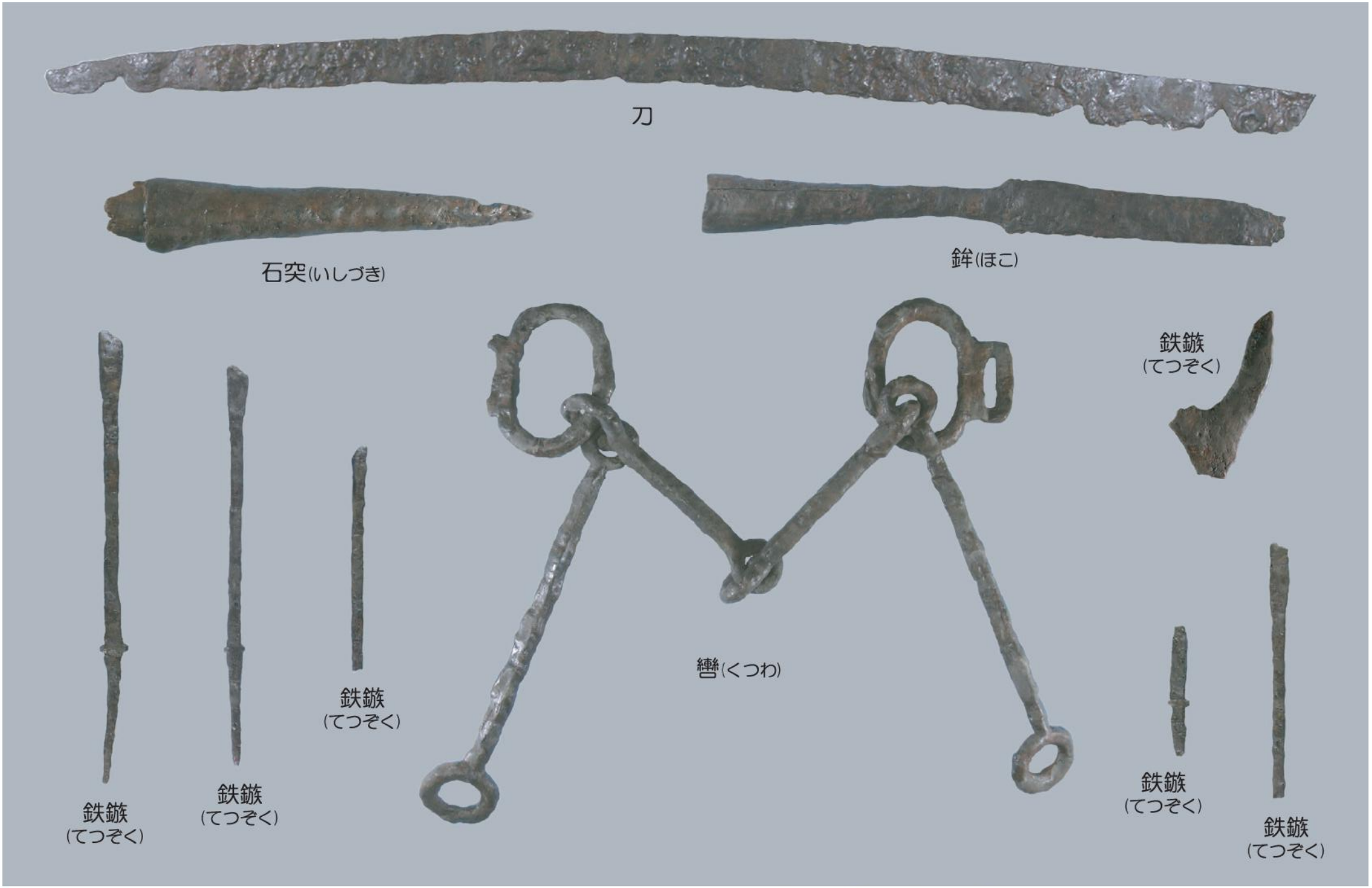
27号墳から出土した遺物②　【須恵器(すえき)】



27号墳の出土遺物図　1（土師器・須恵器）

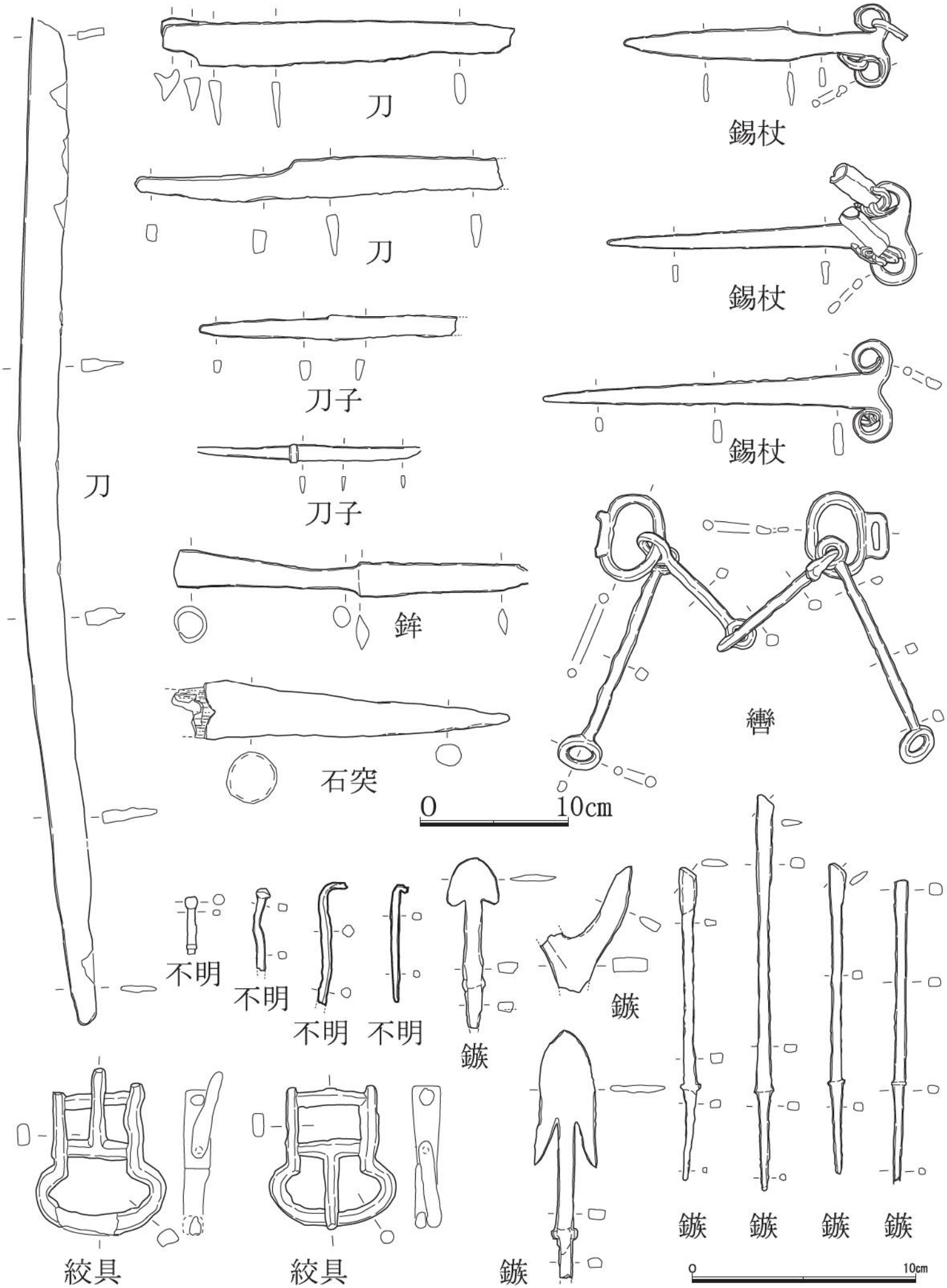


27号墳の出土遺物図　2（須恵器）



27号墳から出土した遺物④　【鉄製品】

27号墳から出土した遺物③　【鉄製品】



27号墳の出土遺物図　3（鉄製品）